川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
昭和五十三年九月二十五日印刷
昭和五十三年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻 六一七号

日川協加盟

No. 617

53年度二賞発表

十月号

高橋操子川柳句集

「千亀利」（川柳塔社・発行）刊行記念句会

日時　昭和53年11月23日1時開会

会場　ロイヤル宮殿
（電話072④1155番）
南海本線・岸和田駅下車、または
国鉄阪和線・東岸和田駅下車スグ

柳話　中島生々庵

兼題「袴」橘高薫風選
「和服」若本多久志選
「仕入れ」菊沢小松園選
「のれん」榎本聡夢選
「展示」川村好郎選
「絹」西尾栞選

席題（一題・当日発表）

謝辞　高橋操子

賞（秀句に呈）各題二句

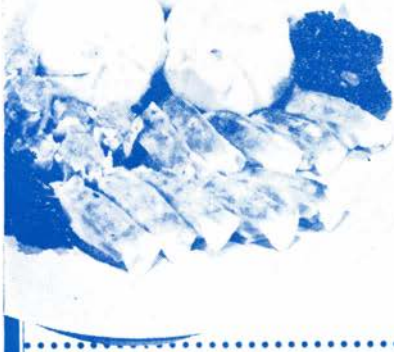
会費　千五百円（句集・記念品呈）

懇親宴　二千円（同会場）

主催　岸和田川柳会
後援　川柳塔社
岸和田文化協会

★懇親宴準備予定のため11月15日までに
〒596岸和田市土生町一九八九―八
（電話岸貝局0724㉒0049番）
高橋操子方　岸和田川柳会へ。

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ



豚饅（ぶたまん）・焼餃子（やきぎょうざ）
焼売（しゅうまい）・叉焼饅（ちゃあしゅうまん）

551 HORAI

大阪・なんば
蓬莱
TEL (641) 0551

《支店・出張店》
なんば高島屋　心斎橋そごう　梅田阪神百貨店　天満橋松坂屋
中之島サン・ストア　なんば新川店・新川売店　ドージマ地下店
南海難波駅構内店　虹のまち鹿鳴店　京阪デパート　淀屋橋サン・ストア
近鉄百貨店（アベノ店・上本町店・奈良店・布施店）

脳味噌までヒビ割れそうな水飢饉

雨乞いの神事は雨雲見えてから

気味悪さデパートに避難非常口

かくれ蓑小細工すぎて笑わせる

丑の日に老妻の奢りやせうなぎ

中島生々庵

大震災

55年前の9月1日が、またやって来た。思い起こせば、私は二学期の始りをすこし早目に故郷を出て来て大阪に居たが、その時間、即ち正午前後は阪急電車に乗っていたせいか、大地震の事など夢にも知らず、のんき千万にも宝塚少女歌劇を観ていた。その内に号外が配られ容易ならぬ情報を知り、大いに驚き下宿に馳せ帰り、東京には親戚や知人が沢山居ても連絡の方法もなく、11月になって、名古屋から中央本線を乗り継ぎ乗り継ぎして東京に着いた。九段坂上から眺めた記憶は、その後20年で私達も経験したあの空襲による残忍さも同じである。直接経験した者でないと想像出来難い状態である。当時の「大正川柳」から拾い読みして見ても、剣花坊が「草枕あかつき寒く腹がへり」「菱形になった戸口を出はいりし」「家中を一つの畳にかたまらせ」「五十年かかり一日でほろび」等々の句を残しているが、同時に「地震など当分無いと其の日まで」の句も一応味わうてみるべきか。

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思い　（路郎）

私の句

其の功を語らず乳房うなだれる　増田竹馬

川柳塔　十月号　目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

大震災……中島生々庵…（1）
路郎先生をおもう日々……小西無鬼…（2）
誹風柳多留廿五篇研究……（二十一）……（24）
清博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原亮
鈴木黄・室山三柳・入江勇・岡田甫
川柳塔（同人作品）……西尾栞選…（4）
水煙抄……正本水客選…（32）
芭蕉のにおい付とは何か…（川柳太平記⑤）……東野大八…（22）
秀句鑑賞……（同人吟）……若柳潮花…（31）
……（水煙抄）……野村太茂津…（51）
愛染帖……橘高薫風選…（48）
53年度　二賞発表……（26）
書評「路郎の息」……橘高薫風…（42）

路郎先生をおもう日々

小西無鬼

ふるくとも僕には仁義礼智信
おれに似よ俺に似るなと子を思い

御存知の故路郎先生の数多い名句の中で、私の最も愛誦の句であり、先生に御指導に御来篠願った時の句会の節御一泊お願いして拙宅で御揮毫を願った節御快諾下さって、もう一枚書こうと仰言って書いて下さった二句でもある。「ふるくとも」は婦人友の会句会の節、葭乃奥様と御一緒にお越し下さった節、篠山小学校本館階上大広間を借用した際、「この立派な大広間に額が一面も無いのは殺風景だなァ」と仰言った事があったので、早速二面横額に表装し町長を通じ学校長に贈った。一面は拙宅の応接間を飾っている。これを見て今は亡き従弟が、こんな句を無鬼も作らなあかんなァとよく冷やかしたり鞭撻してくれた。

奈良県で上田翠光さんが先生の句碑を建てられた節、急な坂道を上って現場に着いて句碑を拝見。立派な石に刻まれてあった句は、

名も知らぬ山の起伏をうれしがり　路郎

であった。式終って翠光さん宅で句会其の晩一泊させて貰ったが、兼題鏡の選をせよと突然のお声がかり。自分の投句分さえ考え考え来た私、支部の句会でこそ選句をやって居る

句集「谷町」刊行記念句会……（44）
インドネシアの旅……白岩文衛……（46）
前号の「の」と「に」について……野村太茂津……（52）
摩訶不思議柳縁奇譚……菊沢小松園……（52）
兼・席題課題表……樫谷寿馬……（63）
雅号ぶっちゃけばなし……両川洋々……（53）
初歩教室……本田恵二朗……（56）
大萬川柳「はずむ」……川村好郎選……（58）
柳界展望……（60）
本社九月句会……（庸佑・整理）……（62）
各地柳壇（佳句地10選）……中川滋雀選……（67）
「文通」……三宅不朽選……（54）
一路集「鉄道」……間嶋青丹子選……（54）
「貯蓄」……国弘半休門選……（55）
編集後記……（一三夫・葉子）……（73）

座右の句

凡人にもつたいなくも湯があふれ　（久米雄）

私の句

血が騒ぐ意地を秘めてる年輪差　行吉照路

井の中の蛙の私。吃驚仰天心臓は早鐘だった何ずれろくな選句は出来てなかったに違いないが、叱らずに済まして下さったのも、遠い所から来たのだからとの先生の温情に涙した。終戦直後の事、郷里での電灯会社が関西配電と併合、社命で文化体育会が出来、文化部では川柳、茶道を、体育は野球を土曜の午後会を持ちそれぞれ講師を招いて教えを受けて居た。野球は以前から行って居たが、川柳を会社一本で講習を受けるには、路郎先生をお招きしてと御都合を伺って居た所、先生の御都合の日は丁度野球部の試合の日に当って居て、他の社員をお迎えに出して、試合決行後一、二回攻守で終了する頃、グランドの側を社員の案内で先生の来て下さるお姿が目についた。丁度守備番で私はマスクを被って居た。Cである。こりや溜らんと、試合どころではないと無茶無茶に早期決着を急ぎ、結局試合は一点差で敗け、早々に社に帰ったが、帰るなり先生は「試合は如何だった負けたろう」と笑って仰言った。ヘイと答えて遠路御多忙の処御出請御礼を申し上げると、社へ来る道に話して居たんだ「無鬼は僕の姿を見たから試合は負けてるだろう」と言われて、人の心理を読まれる先生の鋭さに返す言葉が無かった。

現在でも左様であるが、天下茶屋から大阪駅に出て篠山町迄は優に三時間を要すが、ゴトンゴトンのローカル線では定めし御退屈でしたでしようと話したら、「僕は退屈なんか一つもしないよ、汽車に乗ったら句の選をやってるからね」とポケットからノートを出して見せられた。退屈どころか先生は寸時を惜しんでの川柳普及に身を粉にされて居るんだと、深く頭の下がる思いを今も尚忘れない。

川柳塔

西尾栞選

和歌山市　西山　幸

捨て場所がないポケットの石ひとつ
さりげなく季節見舞を出しておく
花を買うとり残される淋しさに
退屈に飽いた手毬の向う見ず
代役が欲しいと思う日の鏡
風に誘われてひとりの秋景色

八尾市　高杉鬼遊

八月の蟻にも欲しい夏休み
食うものを食えば隣りの猫は去に
公害に弱音を吐かぬアワダチ草
平和にもそろそろ飽きる自衛論
ルームランナー出世に遠い父の足
秋の風犬もあしたを考える

東大阪市　市場没食子

発熱列島言い得て妙さこの暑さ
内科歯科眼科耳鼻科へ通い喜寿
　道後温泉と琴平詣りの旅　二句
念願の坊ちゃん風呂へ連れが出来
踊り場で石段昇る妻を撮り
　悼　足立春雄医博
ギネの教授余戯の川柳も佳句名句

青森市　工藤甲吉

天皇と同んなじ齢で物忘れ
どんぐりコロコロ安住の地を求め
もちつもたれつ耀いている星座
寄附帳に書いた自分の名がいじけ
蓑虫のように蒲団へくるまるか

和歌山　野村太茂津

道草も喰わせて手綱は確と持ち
内股膏薬なるほど少し邪魔になる
ユダになる素質無視する大らかさ

生殺与奪両手で慈悲を握りしめ
思いあがりへ少し憐れが先にたち

倉敷市　水粉千翁

こうなればこうなる何れ愚痴となる
生きのびるひとときがあり茶に坐る
虹が出て他人に戻る雨宿り
出迎えの傘の軽さよ妻となる
奔流の筆白扇のこころ知る

鳥取市　河村日満

仕方がないで観てるナイターだってある
減反へ神の試練は水ききん
石仏へすこし気が向きだした老い
園児服孫を見誤らまいとする
二人目もおんなで気抜けした祝い

大阪市　本多柳志

街路樹の蟬を聞いてる路面バス
聴診器から働き過ぎを叱られる
七十がどこまでつづく定期券
円高の差益無気味な黙秘権
武装してやくざを護るあほらしさ

倉敷市　田垣方大

ご近所に海だ山だとつつかれる
検事さんが盗人かぶりの阿波踊
年金受給人的資源からはずれ
善人の無防備羊の群に似て
根まわしも膳立もして民主主義

桜井市　岩本雀踊子

夫婦傘明日の糧はとってある
この町の人情に惚れた住民票
狂えない男に明日のある暦
ちっぽけな義理にかたむく女傘
父のない子の山彦は返えらない

八尾市　香川酔々

国引きの伝説星の降る渚
夕涼み良寛さんを子が囲み
くの一の衣裳溢れるエロチシズム
ポックリ寺の金魚ゆっくり泳いでる
へその緒がカラカラ鳴るは玉手箱

富田林市　岩田美代

或る日の誤算虫の声に囲まれる
炎天をゆっくり歩く罪を持つ
蟬しぐれ浅い心を攻めにくる
風からの噂人には告げず
盆灯籠愛憎乗せて流れ去り

大阪市　中川滋雀

墓洗う汗のしみいる蟬時雨
不意に鳴る心の絃を緩めねば
骨だけで生きてる鏡へ自答する
火のつかぬライター握っている思案
わたしならこう書く朱筆見当らず

この墓も若死してる蟬時雨
入道雲わが家に男児生まれたり
瀬戸内海如きで元海軍が酔い
旱天の慈雨　雨だれを飽かず見る
しのび寄る秋　二人にも隙間

倉敷市　野田素身郎

羅漢の顔みたいな　土工のにぎりめし
それからそれからとこの人なにを聞きたいの
一ぴきの鯛裏返し裏返し夫婦つつく
攻めを忘れ守り堅める年となり
銀行員たまには自分の札もよむ

大阪市　不二田一三夫

子の飽きた金魚一匹だけとなる
根くらべする雑草に光る露
湯上りの汗風鈴にひいてゆく
夕立へ案定ぬれていたズック
都会とは川まで夜の貌つくる

竹原市　山内静水

円い輪に坐って背中は読みとれず
盆供養はずんだとても消えぬ罪
打ち水を日課にビールが冷えており
訣れる気一度はあって共白髪
志操堅固頑固一徹とも云われ

西宮市　島居百酒

屠殺場へ口動かせて牛が行く
雲があるから大空は写される
叡山がきれいに見えている残暑
朝霧が這う道古寺がありそうで
普茶料理ちと借景が雨になり

尼崎市　黒川紫香

道頓堀夜は気怠な灯がともる
袖口で泣いた時代を見る舞台
友禅の柄と一所に夢も染め
この月の月を見に出る嵐山
地下街へ方向音痴連れ歩き

高槻市　若柳潮花

大の字に寝る倖せや酔いすこし
雷が鳴って昼寝を起こされる
蟬はまだ寝ている草の露に濡れ
そう言えば光のあった日の想い
妻膝をよせて頑固に少し触れ

島根県　堀江正朗

腹立てて腹立つ話きいている
さする手を止めれば寝息醒めている
妻の座に安住していてこぼす愚痴
咳払いたった一つで空気変え
耐えぬいたあとの爽やかさを貰い

島根県　堀江芳子

貧乏も時には売れることもあり

今治市　長野文庫

幾ばくもないのに高い入歯する
ここへ来て見ろと言うよう雲の峰
水すまし何でそんなに忙がしい
一点差ああの時にあの時に

鳥取市　小林由多香

大ジョッキ淵れた五体がよみがえり
新記録プールの波がまださわぎ
信心が食中毒にかかった旅
塩だけは安いと思う物価高
寡婦として生きる踊りの習い初め

大阪市　金井文秋

文明が素朴の文字を消して行く
肩書を取れば自分にさえ勝てぬ
生甲斐をおんな鏡に問いかける
出来の悪いを型紙のせいにする
裏方に徹し徒労に悔はない

倉吉市　奥谷弘朗

ホラ吹きのホラを聞いてる影法師
感謝より出世がさきのお中元
図に乗って喋って引けぬ羽目に成り
ケリがつく一言のある実力者
損してるようでも遠慮が得と成り

大阪市　小出智子

美容院の鏡の中で莫迦になる
女友達とりとめもないたのしさで
洗濯機も私も少し疲れぎみ
ホームドラマの母に共鳴してしまう
父亡きあと釘は自分で打つと決め

大阪市　河野君子

追い打ちの言葉についていた楔
父いつか子等に尻尾をふっている
日記の中の生きざま私は苦労性
低血圧を又言い訳にする女
回り灯籠父よ母よと過去を繰る

藤井寺市　西いわを

炎天の菊作りする鎖夏法
オクターブ上げて機嫌のよい返事
使われる軍手捨てられてる現場
水割りでゴクッと鳴らす喉仏
化粧廻しうしろ絶対見せまいぞ

兵庫県　遠山可住

老境に磨きがかかる頑固ぶり
セールスに向いた女の目に出合う
八月の風へどこかで豚を飼う
ちっぽけな椅子へ五十の腰きしむ
金出来てから太陽を知らぬ肌

松江市　柳楽鶴丸

絵具皿よ教えておくれ好きな色
鹿の介をしのんでのぼるお月様
女房を盗みに来たのか夜のクモ

なぜなぜなぜと子供の成長期
特注でお願いします勘忍袋

大阪市　川口弘生

子離れの悲哀を秘めてけもの道
浪速津に来て海紅豆色淡し
鼻筋の良さ馬並に褒められる
同心円にもろもろの友はめてみる
神仏に遠く居る日の生ビール

東京都　山根白星

み仏の右手は施すものも尽き
灯を消して女豹の女豹たるゆえん
風評は意にも介さぬ女弟子
駅までを人なつこさの村の子と
今だから書ける貧乏物語

愛媛県　渡辺暁童

バターいための　大和言の葉
肚のそこでは　はきだめの鶴
候文の　直截の良さ
破れかぶれの　結跏趺座也
老いの不倫の　藤の咲く頃

八尾市　大路美幸

永らえて雲の峰追う敗戦忌
握手して別れたままの敗戦忌
買出しの哀史は消えて敗戦忌
サイレンを臆病に聞く敗戦忌

米英と書けば哀しい敗戦忌

竹原市　小島蘭幸

悲劇にするも喜劇にするもよし二人
無欲にはなれぬすっからかんである
馬鹿のひとつ覚えがここに来て生きる
許されてあなたの視野にいるわたし
姉さんのケチを笑えぬ日が来るぞ

神戸市　中村ゆきを

夏の夜のお化けよろこぶ知恵おくれ
別宅で倒れ病院でハチ合わせ
看護婦に奥さんですかと念押され
胃カメラで撮られているのは資金繰り
旅の風生年月日も名も忘れ

松江市　中川晃男

夾竹桃一入燃えて原爆忌
三十三回流した涙枯れはせず
クーラーにビールの敗戦回顧談
本日休診白いむくげが揺れている
這うてゆくとこに青山ありかたつむり

富田林市　和田維久子

児のおしめ換える十指にある祈り
一陣の風に逆らう裾もある
想い出の指冷えぬまま爪の濃く
水中花遠いあの日を沈めたし
叔母の訃へ薄墨色の街馳しる

鳥取県　鈴木村諷子

人の世の美空ひばりも年を取り
筆ならし心に文字したためる
露出せぬところも女透けて見せ
哀しみの余りは笑っているように
美しい言葉というが嫌いなり

伊丹市　樫谷寿馬

古里をそっと尋ねた人の供華
ローソクの揺れは仏の溜息か
仏前へ亡父を招いて酌み交す
墓に吹く風爽やかに心凪ぐ
幸うすき人の供えるカンビール

西宮市　藤村〆女

図に乗ってほめる言葉へ口が過ぎ
一生を賭けて渡った寡婦の橋
太陽と正反対に出る勤め
夕陽背に出勤生活の紅を引く
死の床に薬さみしく残される

八尾市　宮西弥生

噂好きいるから敵にまわされず
オーデコロンたっぷり夏の恋仕掛け
途中下車それから噂に幕がない
寄り道をして来た香り抱いて寝る
中年に迷いがあった花の下

八尾市　高橋夕花

父恋し母恋しかり蓮の花
茄子の花まっしょうじきに妊もりぬ
もう母が追えない道を歩きだす
秋扇還えらぬ夢をふところに
能面のその一と言を聞きもらす

八尾市　納糸葉

七夕の祈りが流れつく浜辺
逆光の鏡の中のまがり角
名も知らぬ街のコーヒのほろにがし
一通りの事件にかかわって来た五十
血縁の懐しさを持つ古時計

和歌山市　若宮武雄

遠い高い風にも触れよブーベラン
瓢箪のいびつ見捨てぬ瞳に仏
墓洗う地の底からも虫の声
ふる里は歩こう思い出ある限り
シルバーシート有って無いから気に障り

竹原市　森井菁居

ふるさとの詩を確かに蟬時雨
富士山の上で妥協を考える
心意気だけは一本杉に勝ち
踏んぎりがつかぬ理由に金が要り

長女入院

病室の壁の白さが救いなり

松原市　玉置重人

かにかくも何か哀しき定年譜
終電の女に我が娘を置いてみる
訥弁がズンとひびいてくる誠意
改札を通る素顔の漫才師
異状なし人間ドック出て背伸び

玉野市　小谷仙山

人生の縮図に見える誘蛾灯
盆踊り故郷の風が肌に合う
これだけはどうにも蟹は横にはう
うたたねの顔蚊が好きはえが好き
良い事が有りそうジョッキの飲みっぷり

岡山市　時末一灯

救急車ことさら熱いアスファルト
社のトイレ窓際族の長いこと
イエスとは云えず睫毛が下を向き
一浪の焦り秋風立ちそめる
踊場でひと息ドック入りと決め

姫路市　大原葉香

独楽の芯曲がりて医者の門くぐる
無口よそおい頭は思索の渦がまき
冷房の快適電話で用を足し
炎天下蟻の歩巾は確かなり
ママさんバレーお尻がまりのようにはね

大阪市　本間満津子

白杖の靴　新らのまま移る四季
かくれんぼの孫においてけぼりにされ
ボーナスを嫁にもらって云いふらし
仕上りを急がぬ服が出来てくる
まっすぐな背すじ可愛いい姑でなし

倉敷市　藤原桜山

高原の風もて余す貧乏性
銭の音スクラム一人二人脱け
水中花露の甘さは知らぬまま
善人の切り札明日を信じきる
僕の胃をバリウム画布にしてしまう

守口市　野呂右近

逆らわぬ代り聞かない老妻で
思い切り泣くさ三日の命蟬
米作に賭けた命も曲り角
見事なる連帯意識進む蟻
無い筈の二人の時計にあった時差

大阪市　天正千梢

公衆道徳一人一人は満点で
土用干し梅は三夜の露を受け
丹念な努力よろこびの底さぐり
母と言う便利な名前使いすぎ
母と言う錦の御旗かかげてる

大阪市　藤田頂留子

酷暑今日アミ焼きと云う日本地図
人生本五十二ページ早や半ば

休みない病気に医者の盆休み
風鈴と夜風人間のうわさする
都会生れふと故郷がほしくなる

富田林市　板尾岳人

山の風富田林を通り抜け
山からの便りが届く父の墓
干葡萄やがて見つける山の石
枯れすすき男の足は速くなる
振り向かぬ男に山の風強し

大阪市　大坂形水

谷町も企業格差が目立ち出す
対策はただ荒療治あるばかり
何もかも知りつくしてる門外漢
メーンテーブルで食欲のないフォーク持つ
居心地の良いとこでない主役席

川西市　戸田古方

献立の鮎は七尾にも余り
逆らわずここまで育つ田の青さ
海の幸描けば少女所望する
クーラー・ストップ・サッシ開ければ蟬時雨

新宮市　大矢十郎

世は平和火薬は花火となって燃え
よう混んだ暑い暑いと里帰り
金策も被爆も忘れ野球ぼけ
よく肥える餌で丸まるした鰻

今治市　月原宵明

長髪へ一発びんた見舞いたし
悪人の最期をテレビ見せしめる
うたたねの上に〃頑張る〃と書いてある
骨抜きにされてもお辞儀忘れない

宝塚市　傍島静馬

バランスのとれぬ夫婦で退屈しない
狭心症一病息災云いかねる
あかなんでもともとやんわり値切って見
自分の躯自分が知ってる不養生

藤井寺市　児島与呂志

名誉欲踏みつけにして追い越した
母の目に気になる娘のアイライン
朝顔の花へ朝から油照り
夏風邪は秘密なんかは持って来ず

米子市　石垣花子

母を抜く日の華麗なる羽根の音（娘の授賞）
流れつく流木過去は語らない
新知事の人事へ浮足立つ役所
手すさびで売る村雲の尼人形

米子市　林瑞枝

雨乞いをしたように洗車後の降雨
立ち去った雨残り香の庭に佇つ
パラソルの女奇麗に見せる影
心ないごみせせらぎの音を変え

大阪市　神谷凡九郎

信実を写したいと鏡も思うてる
〝馬鹿〟と云えば落着ける私です
馬鹿バカばかどんな語韻が僕だろう
確に云えます〝出世は出来ない私〟です

松江市　小林孤呂二

常連の数は老舗の味にあり
耐え抜いて妻は羅針儀離さない
うだるような暑さでラッパ響かない
搦手の弱さを若さ見抜けない

松江市　恒松町紅

退職をしてから酒に自己規律
渾酒カー山門に入り儲けて居
駐車場開設山門削られる
出雲路の雨は縦より横に降り

平田市　久家代仕男

冷やでいいからと抜け目のない男
面会のノック入歯をはめて待ち
泰然と正座耳打ち待っている
手が届きそうな一歩に百歩の差

大田市　藤田軒太楼

肩書きの重みについてきた丸み
別荘に招かれ派手な風邪を引き
胸襟を開けば心の棘も抜け
投石の張本人は隅に居り

岡山県　嘉数千代香

野辺おくる風が冷たい同い歳
灯を消して闇の深さに責められる
良心を写す鏡が割れていた
ささやかな歴史だ悔いない足跡だ

大阪市　江城修史

生きる汗へ拍車の蟬しぐれ
人の世の掟よ義理に裁かれる
合掌の両手に余る神頼み
かかる世に人を信じていた不覚

京都市　都倉求芽

好きな柄派手になってもまだ着てる
童心に戻る浜辺のゴム草履
貰いもの値を見にいってわびしかり
蒸し暑い空に月が崩れそう

大阪市　山川阿茶

負け惜しみ背のびの辛さ思い知り
冷えてゆく地球のはずが暑いこと
蓮のうてなポーカーフェイスの雨蛙
月の正体わかってみても萩すすき

兵庫県　大江秋月

首の無い人形置いて孫が去に
八十の母が一番早く起き
母達者引受けている犬の世話
後手にまわって結局高い予算組む

東広島市　高橋鬼焼

ただ歩く男の旅て詩がない
風のない街で絵皿の乾き切る
追憶のページをめくるまるい風
ポケットの小さな小さな切り札よ

大阪市　西森花村

同窓会おたやんの方が若く見え
失敬な阿呆と言う字を僕に聞く
はぐれそな顔で園児の列続く
寄附金の事で眼が覚め代議員

大阪市　河井庸佑

無理を言う積り無理を聞いて来る
駒の動きここまで名人と同じこと
郷土愛まざまざ見せた甲子園
筋書きがあるよう逆転ホームラン

東大阪市　竹中綾女

魂祭り帰るを信じ経木書く
初盆に提灯貰い又涙
初盆へ覚えてる人あり有難く
奈良千灯ろう
釣り灯ろうの火を入れるにも金を取り

宇部市　平田実男

ライバルのミスかばおうかかばおうか
古賀メロディ影を慕いて生き続く
アルバイト暇さえあれば時計を見
立秋の暦に逆らう水銀柱

泉大津市　村上春巳

街の子の礼状が来た分校舎
興福寺写真屋さんが居る木陰
夏の夜の夢万灯籠に灯が入り
鐘の音の浄土へ消える亀の池

京都市　松川杜的

写経の手二死満塁が止めさせる
音階の順に土鈴並らべかえ
六道詣りに（二句）
百円で冥土へ届く鐘の音
水不足水掛け地蔵がうらやまし

和歌山市　垂井千寿子

先祖代々の墓が乗ってる肩の巾
手さぐりの鍵穴冷えた部屋が待つ
社の首尾も持って帰れる我が家です
地球儀の波風へ大空高く澄み

和歌山市　津田与史

核家族という経験をする日来る
また明日があるさ弱気の今日を閉ず
長生きへ記念する日がまた一つ
くだらないテレビ見ている甲斐性なし

姫路市　梅谿庵不酔

血統証ついてて野良の子を朶み
アッサリと老人病と医者の声

恥忍び来たんだろ　よし貸してやろ
隠した不況お宅もと肚を割り

兵庫県　河原　みのる

能登に拾う

浦塩を暫し忘れた波しずか
千枚田嘘でなかったみのの下
岩海苔の悲劇へ祈る岩の形
越後勢ふるえた気魄伝う撓

岸和田市　福浦勝晴

夏の甲子園（二句）

間一髪サヨナラ勝ちへ風が舞う
そそくさとバッグに詰めて帰る土
信仰に行く石段でけつまずき
老年の孤独に似合うベレー帽

島根県　小砂白汀

怖いこと知らぬ若さにつめよられ
コロンボのレインコートに似てきたぞ
とても瀟洒な別れ駅舎の外
後を引く隣りの洗濯ものが濡れ

岡山市　川端柳子

人生に青山あって昼ねする
天の声地の声真夏を透きとおる
その先の先の話の灯をともし
頬ずりの父がのこした肌ざわり

唐津市　新岡回天子

仲の良い鳩餌さつつき合いになり
珍らしい物を期待しまだ奥へ
水道が出ず良く出る水道夢に見て
あれが食べたい母の病気へうれしい日

呉市　林野甦光

ここはまだ戦場基地の有刺線
お芝居の相手社長と浴衣着る
小言癖の女パチンコ打ち乍ら
職人の目である　いくらか頷ずいて

生駒市　草深酔升

成功を当て物当てたように言う
炎天もものかは蟻の御輿ゆれ
お茶づけの味を知らない米ばなれ
年金であなた委せと言ういのち

竹原市　時広一路

追われてはならぬ時計の音などに
学校でこの字あの字は教えない
浜風の匂い大きく吸うホーム
行く先をふと考えていた暮色

枚方市　宮川珠笑

御飯また禁酒の父につぎ忘れ
地を這うていても朝顔花をつけ
目がパンチ受けた目にするアイシャドウ
星空をにらめば星がまばたいた

倉敷市　小幡里風

切った胃へうれしく響くご冗談
ある距離へせめて早起きなとするか
喉元を過ぎたところで中だるみ
父ちゃんが本気になった僕の嘘

米子市　小西雄々

珍らしく素直な妻とレストラン
解決を金で見積るからもめる
ふくらんだ希望へ好きな職がなし
相槌を打つから自慢まだつづき

岡山県　出原敬一

小間物屋の多趣味の一つとウマが合い
出稼ぎの町を不倫の名が流れ
ラジオ体操今朝は救急車と出会い
迎え火焚く愚痴はいくさへ溯り

笠岡市　松本忠三

額縁の曲った部屋で待たされる
撫肩へ肩の力を抜けと言い
一時の迷いここまで来てしまい
じゃんけんの握り拳が負けとなり

下関市　国弘半休門

八方展望蛙の首はまわらない
招かれた不肖記章が大きすぎ
ねずみ取り仕掛けて坊さんが摑まる
暴走車?!バックミラーに促され

呉市　槙田英詩

正直な暦あせもが涸れてくる
この拳握手に変る日を信じ
幾山河孤独を愛すひとり旅
Tシャツのハート二つへ矢が射さり

神戸市　仲どんたく

国民へスキンシップが無い黒字
埠頭まだ一人テープをにぎる影
夜光虫女の素足に砕かれる
鎮魂歌酒は泪か溜め息か

堺市　高橋千万子

にせ医者でも居てほしいとある日の事
コンパクト後の美人又うつる
舶来に弱い女の人だかり
アサガオの明日をかぞえて庶民なり

大阪市　室谷徹舟

夏草のいきれが入るローカル線
痩せ我慢止そう義理の女が居る
熱帯夜睡眠不足が社で眠る
気晴しと避暑に来ましたショッピング

東大阪市　落合思月

中年の魅力指にもある仕草
どこまでも弱者家でも会社でも
お互に折れて喧嘩忘れてる
建前と本音の間で泳がされ

東大阪市　斎藤三十四

脛に傷顔にマスクの鬼でくる
老の坂誇を捨てて軽くする
ベレー帽金に縁ない誇りもち
傷なめてなめて犬の知恵

仙台市　川村映輝

猿山のボス厳と居て平和なり
円高と気温日日新記録
そつのない男欲から崩れ出し
地震の本性見せた震度5

出雲市　原独仙

涼風の吹き込む位置にある豚舎
米倉で眠る運命の稲実る
婚約の歩巾へ浜の砂が鳴る
河豚供養終えて会はフグでちり

大阪市　津守柳信

雑音と思う叱言にいる年期
九十の一喜一憂を笑われる
鉄格子心にはめて寡婦の城
演技派になったつもりの楽天家

倉敷市　稲田豊作

聖賢の道に矢印書いてある
浅知恵のまあ喋ること喋ること
妻は小函に哀しい話詰めて逝き
収入で隣りの大将と比較され

島根県　大森孝華

歩道橋みえて子連れの深呼吸
初対面プライドすこし顔のぞき
珍客へ豊かに暮れて心満つ
テーショッ松もほほ笑むゴルフ場

島根県　栂みどり

夕顔を独り静かに見たくなる
一言が欲しいな父の居らぬ家
詩の旅余生に花をそえてくれ
夫婦故計りしれない歩巾もち

島根県　錦織文子

つり橋は幼ない頃のままでゆれ
ありすぎる文化へ馴れた愚痴を聞く
骨折の悔をギブスに笑われて
レントゲンの正直へ腹を立て

橿原市　岩井本蔭棒

双方が虫の居所悪かった
横文字の広告声を出して読み
推理では抜群だった少年A
恐ろしいものに税吏の黒鞄

鳥取市　両川洋々

神よ横向くな私が裏切るぞ
朝顔反逆しょせんは左巻きで伸び
嘘を吐く女の標準語がきれい
お見舞いを待たす洩瓶をすまながり

西宮市　若林草右

窮屈なレールが背伸びする暑さ
礫に犬が寝ている熱帯夜
風鈴の舌とりかえる熱帯夜
ご臨終ばかり掬ってくる金魚

島取県　清水一保

折入っての頼み玄関もう悟り
児の分も怒りをこめて蚊を叩き
炎天に生きる執念草に聞き
風鈴に心のゆとり取り戻し

永見市　関美子

不揃いな編目へこころの糸を足す
雑学の怪しゅうなって向老期
ヌード群形なし番台の大あくび
円高と別にカモメの歌が売れ

美祢市　安平次弘道

廃坑にたてば空しい草いきれ
墓参りわが家のルーツ子に語る
二者択一中立論は敵にされ
五十年の酷使がのぞく心電図

和泉市　西岡洛酔

足並を揃えてくれる妻が居て
河鹿鳴く宿　一年の労流す
底辺の暮し牛歩の巾でゆく
白い雲秋に目覚める色で浮く

宝塚市　小畠無聖

幸福を摑む両手はあけておく
ヅカガール靴下ぬいだマメ治療
手折られた花が香りを放つ窓
親バカへ子馬鹿もまじる盆の里

鳥取市　大塚豊生

精霊舟手波で沖へ押してやり
土鈴振る女に過去が蘇えり
玉砕の島に変らぬ波の音
何もせぬ事の疲れがのしかかり

鳥取県　林露杖

手が届く前に踏台外される
言わでもの一言大きく息を吸う
音もなく開く花火や星に入る
目立ちたい焦り女のコスチューム

大和郡山市　森田カズェ

デコレーションケーキメロンは匂いだけ
度の強い眼鏡の人で覚えられ
放りだすように自販機釣りをくれ
舞いながら散る倖せな花もあり

大阪市　那須鎮彦

魂を醒ますシャワーは肌を刺す
迷いこむ蝶へ渇いた都会の灯
母子家庭白い応接セット置く
母背負う母の重さへたたら踏む

和歌山市　内芝としよ

原点へ戻せば何でもない話
人の世話すれば出しゃばる杭にされ
仲々に好きと云えない廻り道
一点の重味へ泣く顔笑う顔

和歌山市　松原寿子

一筋の愛黒髪の先までも
好きな人を視野に雑踏かき分ける
逢えた日のロビーは恋の指定席
振り向いて貴方の余韻掌に掬う

米子市　増田竹馬

滝の軸掛けて猛暑に身構える
草いきれようよう着いた滝しぶき
傷心へ無情のマイク突きつける
一と言の多い男の舌足らず

大阪市　黒田真砂

シャネル五番つけて心の武装する
恋人の悪口も聞くイヤリング
六感のひらめき欲しい女です
いいなりの母の涙を見てしまい

豊中市　安藤寿美子

先ずお茶を入れて落ち着く旅もどり
水銀柱たしかめてから涼しいな
日中条約シルクロードを近うする
昼寝うとうと途端に用事思い出し

和歌山市　吉野富子

母子家庭父を憎めぬ男の子
融手借る紙幣製造するように
大卒の所詮蛙の子の歩み
禁煙と云う病名の老の坂

大阪市　神夏磯道子

保育所を帰る母子の靴が鳴る
喜びを分け与えたい日の弾み
傷つける返答だからぼけておく
馬鹿になる術も心得五十坂

米子市　佐伯越子

原爆の人影写す石語り
白壁に夕日映えてる里帰り
喜びの産湯につける温度計
もろもろの生が動いて磯の朝

寝屋川市　柴田恵美子

雑炊はまずいがモンペはファッション
昭和一けたバックボーンは入れ替えぬ
近代史の宿命スピード出しすぎる
分別が分裂三十八度の夜

寝屋川市　江口度

ひまわりが大地見つめている残暑
満腹の蚊に油断あり朝の刑
とんまな蚊おどるあほうをさしにゆく
雲足の早さ気になる倦怠期

島根県　太田亀甲

夕涼み竹久夢二の女見る

いい線が出たので採決あすにする
老人と云わず高令者とよんでくれ
島の娘と聞けばロマンがありそうな

出雲市　高橋　可保留

雷鳴の威力沈黙する満座
世話好きが取柄長寿は露地に住み
調子づきうっかりしっぽ摑まれる
追い越した傘は意外な顔に逢い

鳥取市　有田　とし江

傷付いた子へ云い過ぎを佗びて寝る
何すねているのかひまわりあっち向き
墓参り泣いてくれるな蜩（ひぐらし）よ
亡夫だけが話せぬ話をきいてくれ

倉敷市　藤井　春日

美人哀愁夢二好みの姿なり
天誅の刃にも似た蝿叩き
野草にも自然は恵み忘れない

大阪市　西川　誓二

洗い直しても明治の頭脳です
宿帳へ娘と書けば睨まれる
ここだけの話を皆はとうに知り

今治市　越智　一水

岩を打つ波よビールの泡となれ
人生はたのし天地は父母のよう
涼しさよ広がれひしゃくで水は打ち

失敗も今は逸話となる出世
親元で泣くだけないて飛んで去に
宿題の整理へ残暑尚きびし

諫早市　原田　明春

お盆です夢で亡夫に逢えました
一ときの酷暑ごまかすかき氷
男でも三人よれば姦しい

寝屋川市　宮尾　あいき

出合い頭の確立で打つホームラン
残さない事から戦争回顧録
戦争を知らないだけで罪にされ

奈良県　松田　宇宙太

買ってみて楽しみ消えて空虚満ち
金撒かず歩兵も桂馬も動く技
日本晴れ地下の勤務は損をする

大阪市　神田　秀峰

プライドが邪魔になる日とほしい日と
喪服着る胸に仏も鬼もいる
花作りその人柄が咲き乱れ

竹原市　鈴木　かつ子

逆夢を祈り打たるる滝に汀つ
下痢も又下剤の代わりと負け惜しみ
人情の欲しい仲間が寄る酒場

京都市　山本　規不風

貝塚市　行天　千代

栄枯盛衰母屋の屋根に草が生え
二時間に九本吸いがら訪問者
親同士ライバル意識燃え立たせ

大東市　土岐トク子

バリエーションあってお見合いムードよし
白球がドラマを追って今日も燃ゆ
声欄に庶民の生きた声のあり

大阪市　文川一念

初産のお腹に苦労詫びている
本音ならへとへとになるレジャーです
買わされた後で相場のお中元

七尾市　松高秀峰

お盆にも休まず年金支払し
冷房の部屋に勤めてお盆なし
乗り越えて広い目で見る知恵もつく

大阪市　北勝美

バランスが狂ってますよ上と下
岩清水リズム狂わす蟻の列
何気ない言葉に本音のぞかせる

島根県　飯塚虎秋

浴衣がけ団扇の恋は遠くなり
雲行きへ頬かむりして父はたち
国引きの御崎絵になり詩になり

島根県　西村早苗

初対面とげある人の眼と感じ
結婚の条件洗濯機を廻す
赤トンボ異状発生秋をとぶ

岸和田市　清野こう

遠雷になって落き着き取戻し
子がなくて針一筋のはさみだこ
嫁が来る秋まで親子水入らず

東大阪市　崎山美子

美しい寡婦へ憶測つきまとい
憶測が育ち暴力ふるい出し
きっかけがまだつかめない煙草の輪

鳥取市　岸本無人

つかまってあげたい鬼に手を叩き
夾竹桃お前の好きな夏祭
包んだらあくびの出るほど経をあげ

鳥取県　福田保子

スクラムを組めば男の血がたぎり
サングラスかけて小石にけつまずく
給水制限それから目玉焼きの日々

岡山県　直原七面山

女と男の恋の売り買い
古稀近し寿命に一歩ずつ近し
寿命など考えまいとして眠り
養生に飲んでる酒がよく回り

浜田久米雄

実印を押すにも一度念を押し
強いられた酒腹具合考える

夏は佳し午睡の夢路へ欲を捨て
校歌合唱古稀がずらりと若返えり
現代っ娘裾のさばきも現代っ娘
彼好みうれしく選ぶタイ売場
倖せな西瓜　口紅に噛みつかれ

妻の座を欲しがる女になってくる
愛情のない香水を匂わすな
百鬼夜行の中に女がひとり
欺してる方も散々気をつかい
悩天唐竹割を女の手で

昔話妻に語れば笑うのみ
先輩々々と利用されており
ネクタイの売場で値段聞いただけ
不確定時老人の生き難き
旧友の訃報に朝食すすまない

喝采が消えて私が見えてきた
焦点をしぼれば消えてゆく女
手形落せいや落せぬと三通話
やっとあきらめ辛じて笑い
全力を尽し結果など云わず

本田　恵二朗

菊澤　小松園

若本　多久志

川村　好郎

生きざまは勝手気ままに言えるとき
生きざまの一つバスなら押して乗る
大声をあげる波の上に居る
中風のなつかしさかな声と顔
窓開けただけでも見舞ならうれし

うしろ姿が味方に見えてきて
戦争を知らぬ男の長い足
胸ひらく思いで爪を切っている
いい奥さんになってみたいと女が思う
雨大つぶアヤメの色が水に溶けそうで

春愁の半歳経たるかな秋思
夏の愛形を変えて鰯雲
こおろぎのように泣けたら涅槃かな
城うらのまてばしいの実待つ楽しさ
おもしろさ雀は跳ねて鳩歩く

登山帽きりぎりすを又逃がし
椅子ひきよせてかく建前など言わず
境内の闇にふれ合う頬熱し
ライバルになる因縁の憎まれず
お互いに考えましょう波の音

尼　緑之助

正本　水客

橘　高薫風

西尾　栞

川柳太平記 (5)

芭蕉のにおい付とは何か

東野大八

談林俳諧の指導者宗因は、肥後の八代城主加藤正方に仕え、里村昌琢に連歌を学び、二十七歳の時、主家改易で浪人、芸が身を助けるで上方に出て、連歌で顔を売り、四十三歳の時、昌琢の推挙で連歌の宗匠となる。六十四歳に一子宗春に家督をゆずり、僧体となって隠居する。

宗因は武家の出身だけに謡曲に凝っていた。歌人にとって「源氏物語」はテキストであったように、謡曲を俳諧の源氏として実践し活用したのは宗因である。

—宿れとは御身いかなる一時雨（謡曲江戸）
—時鳥いかに鬼神もたしかに聞け（同田村）
—秋やくるのうのうそれなる一葉舟

第三句目の〃のうのう〃は、謡曲の女人用語で「のうのうそれなる御僧」などとよく使われる。一葉は「桐一葉落ちて天下の秋を知るの片桐且元の名セリフだが、出所は中国の文献からきた言葉だ。

貞門俳諧でも謡曲用語は使われていたものの宗因ほど徹底してはいなかった。宗因が積極的に謡曲口調をとり入れ、武家素養の漢詩をまぶしたところに、清新な印象を大衆に呼び起した。これが談林俳諧の世上にもてはやされる因ともなった。

談林出身の芭蕉が、若き桃青の頃の句風は宗因風といわれる所以はここにあり、初期漢詩かぶれの句にうき身をやつしたもので、晩年には杜甫を自家流に藤籠中のものにした。

談林俳諧は、宗因のいる大坂が本拠であったが、時の大坂は新興の商業都市として、活気横溢の町人気質の天下だった。この気風を謡曲流とは別に、大坂町民の俗事俗言を奔放に句流にとり入れた。この辺の担い手こそ、宗因の片腕と目された井原西鶴（一六四三〜九三）である。

談林に食われっ放しの貞門は、この相手をおらんだ流と眼の仇にしていた。それが昂じて談林派を万古興行から閉め出した。これで頭にきた西鶴は、生玉神社で十二日間の万句興行を打ち二百人を集め気勢をあげた。ここで行ったのが矢数俳諧で、延宝五年（一六七七）五月二十五日大坂生玉本覚寺で千六百句の独吟をやってのける。時に彼三十六歳。ところが二年後、大淀三千風が三千句独吟をやってのけたので、負けじと西鶴は四千句独吟の大矢数のあと、貞享元年には一昼夜二万三千五百句という驚異的新記録を樹立した。時に彼、四十三歳。

西鶴は矢数俳諧の速吟で、そのスピードぶりを発揮したが、当然、詩情などはない。かくてこのあと、俳諧の余技として書きとめた「好色一代男」で、小説・演劇に活躍する。

貞門派宗因談林を「阿蘭陀流」と蔑んだの

は西鶴流の俳諧をさす。彼自らも「阿蘭陀西鶴」と自称して憚らないのは、十三歳で俳諧を手ほどきしてくれた蘭医芳賀一晶による。

大矢数とは、元来京都に伝わるもので、西鶴のその即吟場に招かれた菅野谷高政は、やがて京都に談林を持ち込む。ここは貞門派の金城湯池だが、宗因が京へ乗り込み

―末茂れ守武流の惣本寺

という句を与えられたのに感奮し、宗因に師事し、西鶴の向うを張って、「惣本寺伴天連社」を名乗り、京洛の貞門派をひっかき回した。その相棒が蛇之助常矩の異名の田中常矩。

松尾桃青即ちのちの芭蕉は、この京都で、高政・常矩とともに俳諧修業に入った人である。高政は江戸育ちで京都に入った人物だが森川許六にいわせると「洛の談林は大方常矩が門弟なり」と書いているのをみると、若き芭蕉のスタートは、この蛇の助らしい。このころ、伊丹の酒郷で独自の頭角を現わしていたのが上島鬼貫（一六六一～一七三七）である。「桃青と名乗る俳諧、数度訪ねきたりしが……」と文献にあるが、彼も宗因派だ。

とにかく京の芭蕉がやがて談林派を離脱して旅に出たのは、貞門対談林の二派相剋を凝視していたことも一因ありとみてよい。

芭蕉は「笈の小文」の中で、西行や雪舟や利久の名とともに宗祇をあげていることは人のよく知るところである。しかし、中世の連歌師の中で、最も芭蕉に影響を与えたのは心敬である。心敏は応永十三年（一四〇六）に生れ応仁の乱に遭ったのは晩年である。貴族と庶民をつきまぜた、仏教的無情諦観は、連歌のすべての形、心を客観的に系統づけ、個体の発生原因を徹底的に洗いさらしている。かくて老心敬は「ささめごと」で、その模範的句を作っている。即ちつぎの作品である。

はじめもはても知らぬ世の中
わだの原よせてはかへる沖つ波

この句をもって心敬は、前句と付句の間が詞の上ではかかわりはないが、心の上では一つである。「連句にも親句・疎句二体あり」と言っている心敬は、右の句を疎句の例として挙げているわけである。

和歌の世界でも似たケースはある。しかし前句と付句での関係における親句・疎句の別は心敬がはじめて解いている。心敬の付けた疎句体で有名なのは

わが心たれにかたらん秋の空
萩に夕風雲にかりがね

前句と付句は、関係なく離れてはいるが、決して離れ放しではない。疎とはいわば、並べた二句間の断絶の深さなのである。この深さにある思想の高さが付句の高さをイミするとの判断からきている。

芭蕉がうけついで実践したのはこの疎句系列である。芭蕉のいう「におい付」といわれる手法の正体は、何を隠そうこの疎句の流れなのである。芭蕉はこれを発句に応用した。

この秋は何で年よる雲に鳥　芭蕉

この句は元禄七年、彼五十一歳の作。この句を心敬にあてはめるとこうなる。

（カッコ内心敬）

この秋は何で年よる（わが心たれに語らん秋の空）
雲に鳥（萩に夕風雲にかりがね）

芭蕉門下の杉風が、同門にあてた手紙に、晩年の芭蕉の教えをのべた言葉として

「近ごろの俳諧を世の中の人々はよく理解していない。古い考えにまだこだわっているらしい」というので七読法を教えた。よむこと六べん目あたりでわかってくることは「前句の付けよう各別はなれ、只今までの付けようは少しもなき所、見え申すべし」すなはち近年の新しい俳諧は、付け様が離れていて従来の付け様では全く無いことがわかるだろうというのである。「前句への付け様各別はなれ」とは疎の関係にたつということである。これが晩年の芭蕉が倒達した極点であった。近頃の俳句の「二物衝撃」というのは、この疎句の変化したものである。

清　博　美

誹風柳多留廿五篇研究

—（二十一丁）—

西原　亮・鈴木　黄・室山　三柳
入江　勇・清　博美・八木　敬一
紀内恒久・青木　迷朗・岡田　甫

368　**美しい尼二三人しやかまいり**

西原—これは、句そのままであるが、

美しい仏に尼が二人出来　四二・26

からすると、妓王・妓女・仏御前ということになる。彼女らは嵯峨で尼になったというから、近くでしゃかまいりといえば、「嵯峨釈迦堂」すなわち清涼寺へということになる。

嵯峨の奥いゝ新尼が二三人　二一・29

室山—同。「二三人」がちょっと気にかかるが、二人もしくは三人で——とも解せる。

青木—賛。

かしましいの引きこもる嵯峨の奥　宝十・義2

三人で姦しからぬ嵯峨の奥　四八・24

岡田—賛。

369　**百年跡に泣た日に魚類也**

西原—百年忌の句である。黄表紙『貝徳一炊夢』に、「百年忌には魚類をつかふとうけ給りました。わたくしもどうぞ長生をして、此やうなお料理を魚類でたべたい」。

百年忌御寺が帰り三味を出し　二三・38

山のいもうなぎに化る法事をし　一・15

入江—同。百年跡とは仏の百年忌のこと。この忌日はむしろ目出度い吉事とされ、魚類を食べて盛宴を張る。お経がすんだあとは、三味太鼓でさわぐ家さえあった。

泣いた日に目出度く笑ふ百年忌　七七・36

百年忌さし身さら迄罷出で　七七・36

岡田—同。近ごろは葬式の日に刺身なんか出ますナァ。

370　**女房ハたんなをもしと付ケておき**

西原—女房が旦那の浮気を、もしもと思って腹心の部下（供人）をつけておく。

鈴木—賛。女房の浅智恵、ミイラ取りがミイラになる事もある。

室山—この「付ケておく」のは、いまでいえば日記的なものではなかろうか。また、「もし」は遊里行の疑問の副詞であろうか、代名詞的な、「もし」ともとれる。現在でも「もし」、「もうし」と亭主を呼ぶ人がある。むろん中年の人ではあるが……。西陣では、若い人でも夫を「旦那さん」と呼ぶ。

清―亭主を呼ぶのに名前を使わず、「もし」と呼ぶだけの意かと思う。

青木―清氏説に賛。「もし」＝室山氏説の代名詞。

女房は夫を申と名を付ける

（「川柳絵本柳樽」）

岡田甫先生註に「現代でも新婚旅行では、タマにこんなのがいる」と。

岡田―タマにこんなのがいる」と述べたのは現代の若夫婦は、迷朗さんなんて亭主の名を呼ぶのが多いから。

371　**早い書出し傾城の暮の文**

西原―「書出し」は請求書。現今でももちいる。『日本永代蔵』に「万事を通ひにて取事なかれ、当座に目に見えねば、いつとなくかさなり、払ひの時分、書出しに驚く事なり」とみえる。

傾城は、暮の支払い、来る正月の仕廻に金が要る。それを、「なじみ客」に頼みの文を（暮の文）という。それが、一般よりも早く来るというのである。

廿日過文でおつかけおん廻し　四・29

室山―同。一般の「書出し」より、傾城のは暮の入用だから早い。

八木―同。

廿日過物くるハしく文を書　笞一・45

岡田―同。

372　**しやうばいに身を入レてから夜具が出来**

西原―遊女がなじみ客に夜着布団をねだる。何しろ高価なもの。遊女道に徹しなければ出来るものではない。

身体髪膚損なって夜具が出来　二六・35

商売を身にしみる奴指を切り　一三・39

鈴木―賛。

ふとん三ツハむせっぽいねだり事　二〇・33

夜具をほめながら女郎のははむしん　一八・21

室山―同。そして、やがて、

此夜具もつまりやせんとおそろしさ　一三・23

となる

岡田―同。

373　**金のわらじも有るだらうと豆腐屋**

西原―俗説の高尾の情夫、島田重三郎に頼まれた浮世渡平の襲撃に、豆腐屋に難をのがれた仙台候綱宗が、履いていた、キャラの下駄」を与えたという。そんなら金のわらじも有るだろうと豆腐屋が思ったであろうとの想像。なお、一九の「金わらじ」をはじめ、よくこの語が使われたことから、当時の流行語になっていたらしい。

室山―同。しかし、思ったのは、

下駄を見せねへときらずを買に来る　一〇・28

連中ではなかろうか。

八木―同。金の読みはキンかカネか。本句はキンであろう。

岡田―小生はカネと読むと思っています。一九の「金の草鞋」も、カネと読ませているので。

374　**まっさほな顔踊り子の病ミあかり**

西原―男の中では愛想もよく、顔も白くぬりたてている。それが病みあがりともなれば、商売用の顔と随分のひらきがあるのだろう。

鈴木―賛。

しかられて枕へもどる病上り　六・27

室山―礎稿賛。武士相手で恐れぬ踊り子も、こういう句になると、やはりあわれである。

岡田―堕胎後と思っています。

53年度路郎賞受賞作

満開の花に誘われ修羅出土

大阪府八尾市弓削・志紀住宅七一二
香川酔々

略歴

長崎市出身。九州帝国大学工学部造船工学科卒。藤永田造船所技師。KK啓林館企画室長。高校講師。現在KK啓伸取締役。

数学教育コンサルタント。（主著）
算数に強くなる　三星書房刊
数学のつまずき発見法（数式編）
同　（図形編）

【その他多数】

昭和四十二年羽曳野川柳会に初出席。川村好郎先生の指導を受ける。四十四年同人に推される。同年河内川柳会結成。四十六年西尾栞先生を主宰に菜の花句会結成（河内川柳会は発展的解消）現在に至る。

53年度路郎賞・川柳塔賞

受賞作決定

中島生々庵

53年度路郎賞、川柳塔賞決定のため、最終選考委員会が、9月4日本社楼上で開かれた。例年のとおり、数か月に亘って詮衡された各委員の大変な心労が結集されての候補作品が編集部の手で、無記名清記され委員長である私の手許に提出される。それを携えて委員長はその重責のために別室に閉じ込もり慎重な長選考を続ける。名人戦の対局にも似たる雰囲気は静かなること山の如しの瞬間である。やがて発表である。

栄誉に輝く受賞者に祝福あれ、ますますのご精進をこころからお祈りする。

53年度路郎賞受賞作

満開の花に誘われ修羅出土

八尾市　香川酔々

ふと雨月物語でも読んでる気分になって、出土された修羅の上に阿修羅王が軍扇をかざして、突ったっている形相まで瞼の裏に浮んで来た。作者の老巧さはさすがである。

路郎賞　準優秀作　第一席

菜を漬ける女の業と楽しさと

富田林市　岩田美代

前世における善悪の所行によって、現世において生きる努力と生かされている感謝の合掌。女だけの業では決してないものを。

同準優秀作　第二席

樟脳よ君と僕とは痩せるべし

八尾市　高杉鬼遊

世の中のために、他人のために。それが生き甲斐ともわが身を見つめる尊いまなざし。

路郎賞候補作品

（到着順）

正本水客

推薦句

家族の中で夫　他人になりやすき

河野君子

準推薦

人間が棲めば灯りの洩れる窓　香川　酔々

準推薦

逆わず流れてゆけば海がある　津田　与史

この重さ取らねばよかった鬼の首　安藤寿美子

にぎりめし母の祈りのかたちして　小出　智子

月も光ってる知恵のない貌で　岩田　美代

コスモスの主義主張なき乱れよう　谷垣　史好

凍っても水より逃げ場のない魚　小砂　白汀

雑木林のそこから風のあたたかし　高杉　鬼遊

リハビリーで踏む自転車は倒れない　若柳　潮花

母馬の歩巾になれた柵の道　八木　千代

つばめ来るわたしの無事を確めに　堀江　芳子

☆

橘高薫風

推薦句

満開の花に誘われ修羅出土　香川　酔々

裸婦像で油断をさせた応接間　田垣　方大

秋ざくら痛みをわかち合うている　河野　君子

新雪は新聞配る僕が踏み　石垣　花子

入歯はずして渡したとこが手術台　戸田　古方

本妻の意地です何もかも磨く　両川　洋々

大根をおろせばボタン雪に似て　大原　葉香

どぶ池の客電卓へうなずかず　村上　春已

ハンサムの車椅子から目をそらす　垂井千寿子

春や憂し膝の小猫もみごもりぬ　柳原　静香

〔評〕爛漫の花の下には死体が埋められているのではなかろうかと、梶井基次郎が云ったような妖しさが、桜にはある。一方、千年以上もの間、土中に埋まっていた修羅にも、古いものに宿る魂が宿ってくる。二つの魂が相呼応した結果、修羅が陽の目を見たのだ。作者はこう断ずる。

誠に颯爽とした主観だと思う。桜花と修羅の、形態と色彩からくるイマジネーション、下五のリズム感、共に作者の巧者ぶりからの所産で見事である。

☆

川村好郎

推薦句

菜を漬ける女の業と楽しさと　岩田　美代

準推薦句

明日の灯へ鳴らしてあるく母の鈴　八木　千代

白旗をいつでも出せる夫婦仲　水粉　千翁

樟脳よ君と僕とは痩せるべし　高杉　鬼遊

横糸を少しゆるめて妥協する　西山　幸

一番を守り通して父がない　小幡　里風

両の手でグラス温める日の叛意　中村ゆきを

着飾らぬ女に母の顔ダブル　那須　鎮彦

自己主張五分進んだ時計持ち　香川　酔々

さよならが辛い夕陽よなぜ炎える　松原　寿子

☆

西尾栞

裸婦像で油断をさせた応接間　田垣　方大

リハビリーで踏む自転車は倒れない　若柳　潮花

自己主張五分進んだ時計持ち　香川　酔々

チャンスです今良心が死んでいる　岩田　美代

開店の定連になりそな顔はなく　都倉　求芽

母馬の歩巾になれた柵の道　八木　千代

偉いやつ仰山居るな春叙勲　岩井本蔭棒

準特選

さあ働らこう白蟻こわいことを言う　西森　花村

準特選

本妻の意地です何も彼も磨く　両川　洋々

特選

樟脳よ君と僕とは痩せるべし　高杉　鬼遊

（評）候補作品のうち九句迄、各選者が中間発表の時に選出した句と私の選をした句を選出しました。特選句は、水客、好郎両氏と私と三人選出した句であります。句評は三月号の秀句鑑賞に於て述べている通りであります。

☆

菊沢　小松園

チャンスです今良心が死んでいる　岩田　美代

灰皿に夫の癖が捨ててある　小出　智子

かなしい日も花も微笑ねばならぬ　高橋　夕花

横糸を少しゆるめて妥協する　西山　幸

踏まれたら雑草ひらき直るべし　高杉　鬼遊

家族の中で夫他人になりやすき　河野　君子

ほほ笑むと神に近づく知恵おくれ　中村ゆきを

神様よ聞いて上げてよ千羽鶴　室谷　徹舟

妻にやる風の涼しさ叛かぬか　板尾　岳人

千本の針は女が持っている　宮西　弥生

☆

若本　多久志

推賞句　第一位

着飾らぬ女に母の顔ダブル　那須　鎮彦

準推賞句（二句）

道遠く追い抜く雲をとがめまい　水粉　千翁

昆布煮る匂いの中に亡母と居る　本間満津子

準々秀句

生きのびたいのちしみじみ春の風　高橋　操子

友達は好い人ばかりさくら咲く　小浜　牧人

逆らわず流れてゆけば海がある　津田　与史

忍従の道を諭して母哀し　稲田　豊作

人の世の峠は見えて雲流る　西　いわを

今落ちる雫もまるみ失わず　堀江　芳子

お日さまが昇ると世間しらじらし　谷垣　史好

ゆずられた優待席にある自嘲　本多　柳志

☆

川村好郎氏と若本多久志氏が病欠、正本水客氏は旅行中で欠席。

受賞の感想

香川　酔々

建前も本音もなく、路郎賞がいただけるのは、とても嬉しい。これまで、いろいろな賞もいただいたが、やはり路郎賞ともなると重味を感じる。川柳は、作家の眼（心眼とでもいえよう）を通して、自然と人間の係合い、あるいは、人間の存在における一現象を、流れの中で捉える物語詩であると、私は考えている。この眼で捉える努力が、先師のいわれた、人間陶冶の詩に通じるのではないかと思う。ますます研鑽をつみたいものである。

第25回八尾市文化祭市民川柳大会

と　き　昭和53年10月15日（日）正午開場

ところ　八尾市商工会議所三階大ホール
近鉄大阪線八尾駅下車南東三〇〇米八尾市役所前

柳　話　「俊徳丸の話ほか」　田中　好啓氏

題と選者（順不同）

（席題）……中尾　藻介氏

「蜂」……橘高　薫風氏

「祭」……菊沢小松園氏

「笑う」……伊藤　入仙氏

「種」……田中桂太楼氏

「人情」……三条東洋樹氏

「河童」……西尾　栞氏

※各題二句吐　締切午後一時三〇分

扶句先　〒581（八尾局私書箱第9号）
八尾市清水町一丁目一―六
八尾市立公民館内川柳係
（投句締切10月5日受付分まで）

◎ご出席の方は当日受付いたします

賞　各題最優秀句に八尾市長賞、その他の賞品を贈呈する。

懇親会　一五〇〇円（希望者のみ）

主　催　八尾市・八尾市教育委員会・八尾市立公民館

後　援　八尾菜の花句会

☆十月十日の菜の花句会は休会します

川柳塔賞受賞作
デッサンのままで
成長して女
竹原市　古谷　節夫

準優秀作　第一席
考える蛙
ポカンと浮いてみる
今治市　矢野　佳雲

準優秀作　第二席
私だけ入る
小さな円を描く
三重県　川上　富子

53年度川柳塔賞受賞作

デッサンのままで 成長して女

古谷　節夫

略歴

昭和五十二年三月「竹原川柳会」に入会。
五十二年九月より水煙抄に投句。
住所　竹原市竹原町四、五三五の一五
昭和十一年二月十一日生
職業　広島県立三原高等学校事務主任

黒川紫香

推選句

喝采のない花道を母歩く　福田　保子
準推撰
夫唱婦随ちょいちょい夫の足を踏む　有働　芳仙

準推撰

憎しみが解けて枯野を引返す　小谷　葉子
佳句
考える蛙ポカンと浮いてみる　矢野　佳雲
仕事場の埃は仕事場で払い　船越　汽水
繕って繕ってきた母である　河野　和子
人の輪に丸くなる人ならぬ人　大林曲ん手
約束を果すと眠り深くなる　納　史葉
私だけ入る小さな円を描く　川上　富子
裏長屋遅れおくれに鳴る時計　北　勝美

☆

戸田古方

今朝も亦無事でお早よう云う二人　田口　虹汀
当然なことでこんなに喜ばれ　溝淵美紀子
すばらしい情事なら合鍵を渡してもよい　すがかつこ
耐えることを知って土鍋はみがかれる　松本　文子
おどかしに使う小石なら拾う　花田たけ志
つまずいた石の角にもある丸み　園田多賀子
一寸の虫を殺した手を洗う　文川　野生

二席　候補
落着きましたよ全壁になりまして　北野　久子

准一席　候補
考える蛙ポカンと浮いてみる　矢野　佳雲

川柳塔賞　候補

デッサンのままで成長して女　古谷　節夫

（評）デッサンという言葉から基本とか基準とか又荒削りという感じも感じられる。基準といえば融通の利かない、堅いものとも見えるし、荒削りといえばターザンさながらの野生を憶う。どっちも含めて、もう少女ではない一人前の女性像が、読者それぞれに拾い出せそうである。

☆

私だけ入る小さな円を描く　川上　富子
枕位置そっと直して宿の朝　北野　久子
喪の席で夕餉の支度など思い　杉村婦美子
花の散る軽さ疑い深くなる　小谷　葉子
ピリオッド合掌をして医師は去り　三上　春雄
仕事場の埃は仕事場で払い　船越　汽水
隙のない女の部屋が見たくなり　田中紀美子
人は皆手品のように家建てる　梅本登美也
猫の目が小鳥の動く方へ向く　竹内花代子

推せん句

考える蛙ポカンと浮いてみる　矢野　佳雲

☆

感謝

古谷　節夫

静水会長より、川柳塔賞に貴方の作品が決定したそうですと、お電話をいただいた時は一瞬自分の耳を疑ったほどです。

川柳を始めてまだ日も浅く、感じたままを五、七、五に並べるのが、やっとと言う私にこんな賞をいただき感激で言葉もございません。これも良き先輩に恵まれたお陰げと感謝の気持でいっぱいです。これからも一歩、一歩、前に進みたいと思います。

前号締切後に到着した戸田古方氏の中間発表です。

耐えることを知って土鍋はみがかれる　松本　文子
見ていれば雲は私を通り過ぎ　大林曲ん手
派手好きで母はさらりと美しい　北村　深星
雲一つない大空へ話しかけ　波　ただお
おどかしに使う小石なら拾う　花田たけ志
考える蛙ポカンと浮いてみる　矢野　佳雲
つまずいた石の角にもある丸み　園田多賀子
風吹けば鳴る風鈴が羨まし　原田凡太郎
所詮われ円周の一点として回わり　三宅　ろ亭
安心をして飼い猫は叩かれる　藤原世史春

★

▼**「川柳新京都」創刊**（隔月刊）六ヵ月分―3回―一五〇〇円（送料共）振替口座京都七六五番・電話2211・2897番。―発行所〒604京都市中京区姉小路通柳馬場西入―発行人・北川絢一朗―編集人・坂根寛哉。

★

▼**「川柳都大路」**第2号（月刊）誌友費六か月分二〇〇〇円―郵便振替京都五九七六―電話（075）361・2063番―発行所〒600京都市下京区若宮通高辻上ル・桂ひろし方―都大路川柳社・発行人・西沢青二―編集人・角田辰男（共に10月号締切後到着）

★

▼**倉吉市制二十五周年記念・打吹川柳大会**

11月26日○時半開催。会場―倉吉市上井町倉吉駅前「**富士レストラン三階会議室**」―柳話・河村日満先生・兼題と選者は県川協役員を予定。森田布堂・両川洋々・小林由多香・小西雄々・沢車楽諸氏依頼中。題は―**花道・特技・誇り・持ち味・街づくり**。席題二題各三句。会費千円。投句三百円。連絡先―倉吉市下田中五二八―六

奥谷　弘朗

秀句鑑賞

―同人吟―

―前月号から―

若柳潮花

役人になって覚えたつまみ食い　西森　花村

役人と言うほど有難い職業はないかも知れない。頭一つ下げずとも一日が過ぎてゆく。役得という、つまみ食いもここから生まれてくる。役人にならなければ新聞をにぎわすこともなかったかも知れない。

スタイルは足が短いだけの妻　山内　静水

足が短いというだけで軽いほほ笑みと仲睦しいお二人が想像出来る。いつまでも短足の奥さんを大切に。

詩心ないのが名づけた嫌煙権　不二田一三夫

嫌煙権という文字や言葉を見たり聞いたりしない人は少いと思うが煙草を吸う人にとっては大変なことである。自分の金で買った煙草を吸うのにまわりの人に気兼しながら吸わねばならない。詩心ないのがは皮肉である。

下町のてのひらに乗るぬくい銭　高杉　鬼遊

お宝が有りあまっている人にとってはただの小銭であっても、生活に追われる者にとっては小銭も大切でありまた温い銭でもある。

少し弛めて別の手綱を締めてみる　野村太茂津

人の上に立つ者の誰もが一度や二度は考えて見ることのように思うが、あまり効果は期待出来ないのではないだろうか。少し弛めて別の手綱の言いまわしが面白い。

すき持たぬ男の話など聞かぬ　岩本雀踊子

すきを持たない男と話をするのは気づまりがしていけない、話かけられたとしても逃げ出したくなる。話をするにはユーモアがあり馬鹿話のある方が人間らしい温か味を覚えさせられる。

仲間外れの児も被っている野球帽　小島　蘭幸

青空へ快音をたてて飛ぶ白球、夏場はまさに野球天国のようである。仲間外れの児も眼の中に甲子園があり白いボールが音をたてて飛んでいるのかも知れない。仲間外れと野球帽に何となく淋しさを感じる。

そろばんに合う合わないを言うとれず　大坂　形水

大阪商人を見せつけられているように思える。算盤に合う合わないは別として、損を承知で手を打つあきないもある。それがまた儲けにもつながり大阪商人でもある。

なんで姑おこらはんのか分らぬ日　中村ゆきを

私の父も生前何がお気に召さないのか一と言も口をひらかず、むくれて母をこまらせていた。何もわからない第三者には気まずい時が過ぎてゆく。ほんまになんでおこらはるのかである。

生命の限界まで盆栽刈込まれ　仲どんたく

盆栽作りをする人が口にする椿切る馬鹿梅切らぬ馬鹿と言うように、春に枝いっぱい美しい花を咲かせるためには可哀想でも思い切って枝の切り込みをしなければならない。子供達もいい子にするためメスをお忘れなく。

胡座して読めば敷き熨し頼まれる　草深　酔升

久しく耳にしなかった敷き熨しと言う古い言葉を思い出した。夏になるとのり付けをした浴衣の敷き熨しを母に頼まれて、浴衣を包んだ莫蓙の上に坐らされたことを思い出している。古き良き時代だったかも知れない。

おめでたい夜お勝手に鉢が鳴る　都倉　求芽

雑談に交って御近所のおかみさん達が洗う鉢や皿の音が賑かにする。何か事があるとすぐ集ってくれる人達、こうした風習も、団地が建ちマンションが建ち並ぶ時代では自然と失われてしまう。

一泊の旅ベルトコンベヤーに乗ったよう　竹中　綾女

ベルトコンベヤーと言うのは面白い。

五煙抄

正本水客選

夕焼けに父が帰った気配して
規則があると破りたくなる若さ
決断の後の小さな不信感
猫背にも愛着があり風受ける
妻の持つ色に子供が染って来
絶対と言い切る女の細い眉

海南市　牛尾緑楼

音の無い暮しに慣れた市場篭
泣き虫の私にもうすぐ秋が来る
毛糸編む指の動きをうらやまれ
アラどうしよう見られていた投げキッス
美人に写ったのでアルバムに張る

松原市　北野久子

守備範囲その真ん中に台所
にせの色ばかり都会の灯に疲れ
頼りない人　相槌はすぐに打ち
他人へは親切　妻にまで出来ず
かみ合わぬまま風化して失語症

愛媛県　宮尾みのり

負けいくさ天狗の鼻が焦げている
脱ぎ捨てた仮面の罪は許されぬ
信条の白きボールを投げてくる
春の絵を描いて別れをさわやかに
新しい石碑のまえでする眩暈

伊勢市　山本光男

美女でなし片目をつぶって見ても妻
ひまがあり過ぎて写経に身が入らず
家の事思い子供に嫌がられ
受売りの悟った言葉賞められて
そう聞けば鼠の干支の妻である

尼崎市　中塚喜甲

来客のある日の母の身だしなみ
愛されてたと信じて寡婦の心満つ

京都市　松川芳子

熱帯夜月さえ焼けてる色に見え
お盆です坊さん同士がすれ違い
ナツメロへ母は元気な声になり

岡山市　原田凡太郎

やめられるものかと煙草つぶやいた
妻の愚痴そうだと思いつつ叱り
何もせぬ汗を淋しく今日も拭く
そっとして欲しい涙をまた聞かれ
捨てに出た欠伸へ空が青かった

高槻市　竹内花代子

作業着の汗を洗ろうて夜干しする
カーテンの色それぞれに団地の灯
何言うていても夫婦に通じあい
長唄を弾いてた頃の写真が出
駅までの日傘へ誘うひとがいる

和歌山市　浦野和子

惑溺の中に菩薩を置いて見る
蓮池を巡る真昼のファンタジー
片方の耳で噂は聞いて置く
思い出をその折々の小引出し
バランスを崩してからの素顔です

岡山市　砂田静佳

下水まで水を探して来た蛙
喜寿になり馬鹿になること身につける
沖へ沖へ引き潮島をおきざりに
今日の彩　話がはずむ夕餉の膳
依頼心捨てろとさとす肖像画

岸和田市　池田香珠夫

消えかけて虹は青色だけ残し
虫ピンに似た目高の子の大きな目
子は親のコピーわんぱく手に負えず
かとんぼをつまむ受話器を持たぬ手に
海女が頭にのせた桶からあわび買う

呉市　山根喜代美

人情のかけらが欲しい吹きだまり
意地張った末を孤独の中に住む
ライバルへひけめカナリヤ歌わない
ショートしそう夫婦だまってすれ違い
放浪へ郷愁そそる草いきれ

大阪市　岩井公平

蟬時雨やめば遠くも蟬しぐれ
蟻が来て蓑虫が来て樹下楽し
民宿の朝の神棚拝まされ
白線はのたうちアスファルト発熱す
篝船火火へ裸立ち向う

八尾市　田中紀美代

娘が選ぶ帽子ロマンス生まれそう
思いつめた振りして立つのも少女です
人間のずるさ干支のせいにする
泣きじゃくる児を姑にさらわれる

夏やせを期待している猛暑かな

熊本市　有働芳仙

結び目がいくつも出来てる夫婦仲
握りかえす手には愛などない別れ
真二つリンゴに嘘のない香り
離婚して独身主義の肩を持つ

出雲市　園山多賀子

つき当り会釈交して蟻の列
横縞を着て女まだ老いかねる
吉野杉よっぽど躾よく育ち
清流の岩に男は佇って見る

札幌市　北村深星

枯れ松へふと定年の俺を見る
逆光線なぜか小さい母の影
母の嘘今も優しく生きて居る
浮雲へ安らぎを見る淋しい日

尼崎市　中谷利美

ああそうか妻の話に主語がない
若者に敬語忘れた座談会
年金の足らずを利子で埋め切れず
ジーパンの尻を振ってるのが女

島根県　松本文子

したたかな老いナムマイダナンマイダ
巣へかえる小鳥も夕焼けに染まり
かぎっ子の小箱に貯めた星の詩

哀しみを吸いとり湖は青いまま

和歌山市　坂口公子

せせらぎの音は灯りを消してから
遠慮勝ちにそれでもキッと噛む小蟻
日傘まで黒とはいかず野辺送り
葬列の日傘の波に音がない

今治市　園部正則

呼びかけてみても思い出はちぎれ雲
引汐に捨てても淋しさ寄せてくる
海の広さにとまどい色の浮き袋
心の襞見つめれば過去がかけめぐり

島根県　角耕草

草刈りが水をかぶったように濡れ
山百合を大事にさげて草を負い
水番がラジオ鳴らしている堤
川狩りの児等の仲間に引きこまれ

東京都　村上由希子

山の湯に深夜浸りて一人じめ
湯上りはまだ見られます大鏡
東京の空　智恵子でなくても青がない
欲とけちどちらにも軍配あげられず

呉市　玉木志恵子

魂がうようよ還る原爆忌
常識を外れた人へうす笑い
忍従の妻ながら子に躾け

炎天に行きつかえりつ赤とんぼ
松江市　梅本登美也

おやシャツが半ば乾いた立ち話
へそ繰りは家事労働のお手当よ
石の艶波と苦労を共にする
異議なしで終り料理も豪華版
名古屋市　大林曲ん手

朝飯の旨い港を母とする
たわむれに母は背負わぬ事とする
未来図へだるま片目を開けたまま
ずば抜けた筍やぶで果てるなり
和歌山市　福本英子

猛暑まで食べたか向日葵艶々し
原爆忌ここにも夾竹桃の紅
初盆の亡夫を迎える月見草
琴線に触れた日女らしくなり
唐津市　桧垣岩光

青を待つ間にビルの影延びる
井戸端会議へスクープ小声で来
星さがす親子夜空に語りかけ
ベランダに妻呼び寄せる月の冴え
大阪市　平井露芳

水恋しトンボもプールの上を舞い
ランニング部屋ではぴよんぴよん撓ねるだけ
雄琴温泉ネオンに稲も眠られず

作り物の蛙が庭で身構える
唐津市　三浦ひろ坊

お互に愛の化石をもって老い
タクシーに押し込まれたは覚えてる
千歳飴曳きずりママに曳きずられ
ああ遂に河川敷にもゴルフ場
唐津市　田中紫浪

叩き売り損したように売りさばく
二人目の嫁ぐ貯蓄が間に合わず
使い捨てライターちょっとだけ探し
主張なき追従それも生きる術
島根県　佐々木裕

三食も昼寝も成らず妻稼ぐ
クーラーにすまなそうに秋の風
昼寝する茶缶枕の妻も老け
母訪えば増えた年金遺ると云う
総社市　水子つるえ

働けるよろこびの箸持ち直す
父はM子はLサイズ濯ぎます
もう隠居しなさいよとは他人がゆう
いや味なく自慢話を聞かされる
鳥取市　北野天人

見舞う度妻明るさとりもどし
松葉杖がつけてうれしく電話する
雪が消え緑萌え夏がきた病窓に

夫と子の肌着を買うて満ち足りる
大和高田市　岸本　豊平次

節水にもつたいない程滝の音
間引き子に似た休耕田に繁る草
横着も子に言わせれば合理的
聞かせたくないなら小声で言ってくれ
長崎県　岩崎　和子

身に覚えあってそこらは目をつむり
他人の目をさけて歩いた失意の日
歩み寄る姿勢は見せて妥協せず
カーテンも褪せたベッドの闘病記
羽曳野市　麻野　幽玄

孤独を意識しては月に笑われる
鴻毛の軽き命よ原爆忌
義歯入れて舌落着かぬ日が続く
来世を信じる歳と成り写経
寝屋川市　小林　鯛牙子

植木鉢二つまで割り雷逃げる
鱧ちりの骨食いあてている弱気
物干が特等席よ花火待つ
石置き屋根に青柿の尻落ちついて
広島市　光井　美保子

古き療友心のすき間を埋めて去る
再会を約す瞬間すきま風
花の土買って明日の種子を蒔く

騒音をすっきり止めて寝たい朝
岡山県　池田　半仙

糸車昔のリズス還らない
赤着ても年寄の動作出てしまい
クーラーは利己主義暑さ外にはき
一人だけで留守番すれば広い家
鳥取県　加藤　茶人

母の愛確かめたい日子がすねる
俺だけの宝日記の誤字脱字
子の箸のそこそこ踊りの渦へ来る
どうすねて見ても習性餌を運ぶ
岡山市　清水　金太郎

筋書の無い球宴に酔いしれる
水をやる庭木へ暑さ語りかけ
此の夏も暑いと思う蟬しぐれ
還暦の祝のプラン子に任せ
富田林市　中村　優

句読点ツボを外さぬ娘の詩集
ジャンケンポン男の有情しゃんとあり
争いを避ける虚しい妥協性
過激派の唾は天に届かない
旭川市　朝倉　大柏

威丈高の方が弱者という団交
古くさい唄でも眠る孫の顔
詫びるのに偉い名刺を借りてくる

言われたら怖い返事を聞きにいく　新潟県　高野不二

初任給ああ年金の額をこえ
酒が云わせる言葉本音もまぜてあり
ベストテンあきずに同じ歌をきき
日記書く意欲がわいた今日の雨　出雲市　森山健太郎

ドラマ低調刑事の髪が長過ぎる
過疎の知恵観光客の地引網
医大開学喫茶店だけやけに増え
宍道湖の夕陽地元は見て居らず　兵庫県　辻文平

灯を消して篭の蛍に夜を与う
幸せな人よと近所が決めて呉れ
仁王像の阿吽の間にある笑い　鳥取市　中森葉士人

受付嬢白髪頭で覚えてた
送り火の消えてまたたく星を見た
師の影は少うし猫背であたたかい　島根県　山根峰雪

わが決めた場所にしっこくつばめの巣
おしゃべりもやんで深夜の汽車の旅
歯を痛めおかゆ続けて胃が治り　今治市　矢野佳雲

角店がへばりついてるビルの街

綱引きは先頭だけが睨み合い
いい知恵が出るさと先に酒になり　熊野市　坪田冬花

病気してからいろいろの神が来る
目を閉じて音の花火を聞く病間
待ってたと云いたいような顔を見せ　大阪市　欄蘭

涼しさと節電兼ねて消灯し
久しぶりに会えばやっぱり飲む話
くちなしの香り昼寝の顔を素通りし　山口県　高崎雀声

アルバムに我が人生をとじめる
しかたなく止まって出てゆく無人駅
夏休み母送迎の塾が待つ　東予市　小山悠泉

あやまりに行くにも女化粧する
夾竹桃原爆のろう色で咲き
赤潮へハマチの悲鳴聞こえそう　豊中市　満仲きく子

ひよどりと目と目が合うた山の駅
のろけたり食べたりせわしい里帰り
しゃぼん玉飛ばそ亡母さん天にいる　岡山市　井上柳五郎

あの老友も辞めたと老父の重い靴
きめていた答が違うからあわて

片便り続き旧友訃の知らせ

出雲市　高見鐘堂

円高利益どこへ消えたか物価高
影も動いている真夏の花時計
障子ごしの影も小さく母は老い

広島市　すがかつこ

遠吠えで飯のまずさはまだ言わぬ
劇画の終った結婚式へ招かれる
知恵の輪をどっと投げ出し遺書未完

出雲市　板垣夢酔

妻の愛聞かずじまいに終りそう
不倫ゆえ別れの車窓手が振れぬ
香水を嫌う女房で妬いている

大阪市　白石潔

乱雑に靴脱ぎすてて帰省の子
急ぐ蟻台風近いなと思い
故郷で花など作る夢をもち

竹原市　古谷節夫

何事も無かったように陽が沈み
多数決と言う横暴だってあり
コップ酒一気に乾して日課終え

倉敷市　中島彩平

灰皿へ午後の不満を溜めて居る
井戸水の音から朝が明けてゆく
不快指数蟬も灼けつく程に照り

唐津市　田口虹汀

謡曲も碁も同格の友であり（同窓の友逝く）
床漬の胡瓜平和な朝の膳
鍬形も鈴虫も住む子のお城

岡山県　二宗吟平

おばさんの旗にストップ命ぜられ
赤字とは見えぬリズムの汽車の音
自叙伝を書いてさっさと先に逝き

大洲市　横田放人

子の夢を空へ運んでシャボン玉
ちびた靴磨き新任地へ向う
肩どやし合って無上の祝い酒

寝屋川市　稲葉好子

外孫にちょっと淋しい母の肩
建前と本音のひどい評論家
民宿の料理ホテルにまねて来る

橋本市　岩倉天彦

鐘叩く先祖が耳を塞ぐ鐘
死金もたまりぼっくり寺へ老夫婦
やんわりと嘘かみしめて飲むグラス

岡山県　柳原孝柳

赤とんぼきびしい中に秋をつげ
無事に父の歳を越した今日
父の命日と釣りの大会鉢合わせ

大阪市　堀口欣一

菜園のプランを練って妻達者
若者に野仏巡りするプラン
カチワリがうまい茶の間の甲子園

橿原市　西本保夫

耐えがたきに耐えていち日平社員
残ってる休暇にも未練の無い定年
よい面もある住友の封建性

出雲市　吉岡きみえ

うれしい日まるい心にまるい月
青空へ子持ち女の洗らい物
寝返りひとつにも骨がなる節がなる

藤井寺市　中原比呂志

炸裂音今は平和な夜飾る
ダイヤルを廻せば親の出る甘え
惚れ合うているからお金も綺麗です

島根県　岩田三和

せせらぎの流れにつけて灰汁をぬく
住みなれた村を今朝も一廻り
生きのこり一人は矢張りつまらない

尾鷲市　渡辺伊津志

温味秘めた銘菓のマロン調
のびやかな笑いが酔いをたしなめる
電灯を照らせば蝦の眼が縮る

倉敷市　中津伊勢吉

軽口も言える長寿がうらやまれ
稲の出来語らず減反のみ話し
算盤を見せて上手な嘘をつく

岡山市　花田たけ志

きっかけで不作が死ぬるまで続く
サングラスプラスアルファの視野があり
センターは子守兼務の草野球

長崎市　村崎三車

早発ちの味噌汁二度に吹いて飲む
原爆忌陽は傷心を射てまとも
ボロボロの辞書に偲ぶ青春記

名古屋市　越村枯梢

子らはみな出城を守ってたじろがず
借り物の妻かも知れず夫妻箸
天の川堤防が見え橋も見え

羽島市　伊藤静枝

暑いのをまぎらす手あり甲子園
朝顔は二階住いへ伸びてくる
世の噂きき流してる瓢ゆれ

豊中市　田中善四郎

サングラスかけた我が子に親めず
円高し尺取虫はゆっくりと
失意の日蛙がポカンと川に浮く

兵庫県　高橋近江

干天に日まわり頭垂れたまま
米余る野菜があまる手が余る

古里の良さがふるさと出て分かり　町田市　竹内紫錆

握手慣れした子に親は何人目
テキストもむなし海峡雲になり
成田へ戻ってまた長電話　岡山市　串田句眛地

どじ踏んでからの安らぎだってある
四転五起敷いたレールが光りだし
手の届くとこで手折れぬ花へ媚び　泉佐野市　大工静子

腰おろす石に御免と許し乞う
泣き声は保険所前のみかん箱
カナリヤの替りに蛇がトグロ巻く　寝屋川市　福富隆子

不用品捨てるに夫婦のちぐはぐな
揉めて居るいつもと違う娘の目
炎ゆるもの欲しい土用のアスファルト　羽咋市　三宅ろ亭

左前の男へ合槌も打たぬ婆婆
旧盆の海　もう秋の波も混ぜ
夾竹桃のおませ塀上から顔を出し　兵庫県　野々口木綿也

さしかけてくれた蛇の目に吸い込まれ
炎天下孫の宿題うめに出る
年寄りの何か言いたそうな眼鏡越し

青空がバカに大きい嬉しい日
むし暑さゴロ寝をアリに笑われる
神・佛やっぱりあったこの一瞬　青森県　波ただお

サングラスはずして語る街の角
百姓のほかの仕事で疲れはて
心配もふくまれしあわせ願う日々　唐津市　岩崎實

弁当を買う楽しみの汽車が減り
思い出の旅にした日の句碑写す
ポケットの小銭で人間味の夜店　岡山県　岩道博友

路地裏の風情花火線香に見る
台風を待つ人間の得手勝手
暑さにも蟻つぶやかずただ励み　吹田市　藤原世史春

手鏡にきょうはきのうとちがう顔
孫の群疎開のような夏休み　唐津市　桑原掬治

海水浴たかがシャワーを制限し
台風よ水瓶渇れぬ間にござれ　唐津市　筒井朴竜

夫婦仲適温らしい子沢山
故郷の磯の香りにはずむ足　倉吉市　野中御前

梅雨の音あじさいの花と語り合い　大阪市　野田君枝

カラオケが主役町内の盆踊り　唐津市　山下勝一

手花火のごと交通事故で逝き
そうめん流し手際よいのがいて楽し　倉敷市　大森登竜

裸婦の絵に佇ずむ足は逃げそうで
豪勢に見栄を切ってる裸銭　兵庫県　川井白峯

ふる里の話次々汽車は行く
台風が夏の胡瓜に止めさし　徳山市　徳重馬笑

妻と来て今日東京の水を飲む
人混みの中に私はここに居る　大阪市　中辻千子

一日の猛暑偲んでしまい風呂
猫嫌い窺うような顔に見え　大阪市　新川貞祐

命まで担保に入れて買うた家
階段を積み上げ明日のビルづくり　松江市　黒目大鳥

山々は会わず国曳き神在す
ふるさとの声が激する甲子園　八戸市　島田昭治

ステテコで電話聞くのも男なりや
うるさ型今に思えば有難し　出雲市　園山栄

終点に延長がある義理の椅子
人間に正札つけたら笑うのか　唐津市　玉置嵌

西洋のように水売る水ききん
筆不精せぬでも今は電話の世　大阪市　三宅モト

家建ちてこおろぎいずこに宿を変え　鳥取県　福田保子

（前月分）

サングラスかけて小石にけつまずく
舳寄せて漁村に長い冬が来る
無心聞く母の財布の鈴が鳴り

☆

ちぎれ雲あれが親子か兄弟か
写真師が待ち伏せている太鼓橋
乾杯は左遷にふれず送られる　大洲市　**米沢暁明**

さっと詫びる若さが拳あわてさせ
俎板の音から違う母の味
何時からか待つ人となり鏡もつ
シュピレコール妻が振る旗なら負ける　岐阜市　**市川鱗魚**

受け継がれた「路郎の息」

橘高薫風

大坂形水著、古稀記念句集「谷町」を読んでの印象は、「路郎の弟子」の一人だなぁという思いだった。穿ちを利かした批判の目が随所に窺える。一番言いたいことを最初に書いて、さて目を著書に移す。見るからに瀟洒だ。落着きがある。重さもずっしりと重く貫録がある。装幀はツィード風の生地で、洋服の問屋さんにふさわしい。私は常々作品や、作品を集めた句集は、すべてその人の分身と思っているけれど、この句集ほどに、著者の人柄そのままの句集も珍らしいのではなかろうか。控え目で温厚な性格の著者だが、肝心なところは妥協せずに筋を通される芯の強さがあればこそ、まるで分身そのもののような句集が出来上ったのだ。編集の一三夫さん、写真の岳人さんも誠心誠意、協力された。著者近影にしてからが、素人が撮ったにしてはすばらしい出来で、形水さんの性格まで読者に伝えてくれる。このような句集の出来栄えも、畢竟、形水さんの徳のしからしむるところであろうか。

―**谷町は丁稚車にきつい坂**

句集の冒頭、戦前の作品の中の第一句「少年時代を憶う」の前書がついている。石ころ道を車を引いて坂を上り下りする苦労は立志伝の著者の根性を養った。この句集は、この一句に始り、この一句に終ると云ってもよいようだ。形水さんが、最初、句集を「坂」と命名しようとされた所以も、ここに由来する。麻生路郎先生が、大坂君の商戦首途に送る言葉、として、庚申孟春（昭和十五年）揮毫の「足踏みをすな」の座右銘とともに、谷町の坂は形水さんのバックボーンになった。読者はいきなりこの佳句から深い感銘を受けるわけである。

―昼のサイレン歯ブラシくわえたシュミーズの女

昭和九年の川柳雑誌十一月号に一句掲載されたのがこの句、処女作である。戦前には街中でも郊外でも井戸が多く、共同炊事場、共同洗面所の役割を呈していた。そういう場所での所見であろう。私は、この句の延長に、昭和四年に流行した、

恋のサイレン何処までとどく
待てば思いもみなとどく
テナモンヤないかないか道頓堀よ
の「浪花小唄」や、
酔うてくだまきゃあばずれ女
すまし顔すれゃカフェーの女王
道頓堀が忘らりょか
の「道頓堀行進曲」など、キャバレー華やかなりし南の灯を連想する。少しロマンチックに過ぎるだろうか。形水さんのロマンチックな句は数少いけれど、

―車窓暖かここは明石のお舟がたんと
―車窓暖かチルチルミチル顔並べ

などのメルヘン風のもの、

―老船員心斎橋の昼歩く
―蜥蜴の恋光り二つになりて逃げ

など詩的なセンスのひらめくものなどがある。女を詠んだ句も、

―雨の多いドラマ女はからだ売る

の情緒的な句、

―拒絶する身振りにしては艶めかし
―喧嘩して女夜食が欲しくなり
―末席の手酌へ妓知らん顔
―仲居さんピッチャーの型でみかん投げ

など、現実写生型のものと両面をこなされているが、句集全体を通じて流れている形水さ

んの川柳血液型は断然後者で、「仲居さん」の句は、最もその本領を発揮された見事な作品であると云える。宴会の、酒で少し乱れ初めたその場の雰囲気まで活写されている。見事な作品という言葉が出たところで、この句集中白眉の数句を挙げることにする。

—合併をされ先代の額降ろす
—ワンマンになれぬ血液型である
—赤ちゃんが突如気持の良いおなら

新幹線開通

—晩飯に来いと岡山から電話
—天国へお嫁に行ったのだよきっと
—**合併をされ先代の額降ろす**

句集「谷町」には、商売の厳しさを詠んだ作品が一番多く、一代、名を成すまでの様々な苦労な経験が中心となっている。

—船場からまた名門が一つ消え
—電話では断われそう手紙書く
—企画部へ社長の体験邪魔になり
—カルメラに似た経済の膨れよう
—丁稚した足腰不況向きにでき
—倉庫から倉庫へ動くたび膨る
—デパートのデザイン盗りに行くカメラ
—一喝をするに適した日本語

一喝をされた時代には考えられなかった、一喝をする立場の人の苦悩、形水さんの句には深い深い裏付けがある。

—健康法の一つに社長早出する
—デザイナーの或る日遊びの鋏持つ
—ルンペンの服からヒント得たモード
—あべこべの値札のままで出てしまい
—この辺を歩きたいのに見送られ

これらの作品は、社長業の余裕だ。

—**ワンマンになれぬ血液型である**

社長はワンマンでなければならぬだろうが目的を達するまでの持って行きように個性があることだろう。

—肩書は多いがどれも副ばかり
—裏芸の方は負けない浴衣会

形水さんの趣味は、どちらかと云うと、運動神経に関りのあるものに熟達しておられるようだ。ゴルフはシングル、玉突きは四つ玉で二百を軽くこなされる。ところが、書画、小唄、碁、将棋の類は、一通り何でも手を染められたけれど、物にはならずじまいらしい。

—**赤ちゃんが突如気持ちの良いおなら**

円満玲瓏たる形水さんの性格が写し出されたような句だ。

—**晩飯に来いと岡山から電話**

山陽新幹線開通当時の句だが、前書の句の旨さは路郎先生からの伝承とも云える。誠に時宜に適した事柄内容を詠みこなされていて、洒脱な軽みに敬服する。

—**天国へお嫁に行ったのだよきっと**

嫁入り前の令嬢を亡くされた昭和四十六年二月の句である。

—手を握り返してきそう握っててやる

冷たくなった愛娘の手を、なお握り続ける形水さんの姿には、路郎先生が長男を亡くされた時の作品のあれこれを思い出させるものがある。

—正義派を自認している総会屋
—日の丸を忘れた街を見る銅像
—屋根よりも高く飛べない寺の鳩
—だと云って今の野党でどうだかね

これらの句の穿ちと批判の目、

—なかなかに去にそうでない笑い声
—新築はどの窓からも陽が入り

の軽みなど、「路郎の息」を思わせる。

そして、路郎先生の絶唱、

妻よ子よばらばらになれば浄土なり

の夫婦観には、

塔に佇ち夫婦の思うこと同じ

で奇しくも、継承されたと思えるのである。

形水さん、おめでとう。

句集「谷町」好評発売中
千五百円（送料共）
発行所　川柳塔社

あなたの川柳句集を！
お気軽にご相談ください。
印刷全般　藤原童心社
〒564 吹田市天道町6番15号
でんわ(06)三八八—二三七七番

大坂形水・古稀祝賀

川柳句集「谷　町」刊行記念句会

―昭和53年8月27日

―心斎橋大成閣

乾杯する形水氏ご夫妻（カメラ・岳人）

この日、心斎橋の大成閣四階入口には、白い封筒がまばゆいばかりに積みあげられていた。句集「谷町」がズッシリ重い。

「ほう、表紙は箔押しの金文字や。そこへ各ページの句の配置など、さすがにプロがこしらえた句集や、立派な本や……」そんな声も聞かされた。

与呂志・重人・敏さんら交通局トリオが威勢よく動きまわっている。〃初荷〃といった感じだ。会場は丸いテーブルにそれぞれ気の合った人同士が丸くなり作句に余念がない。

各柳社のお歴々も形水氏の今日を祝ってご参集いただいたが、中には二十歳頃からの親友である河内卯一郎氏もお顔を見せてくださった。河内氏は読売テレビの各部長を全部歴任されたという方である。（筆者もこの方にある雑誌へ記事にしてくださった恩人でもあり、拙著「川柳寄席」の口絵の写真にもお世話になった）この河内氏をはじめ高鷲亜鈍、伊藤入仙氏らは五十数年来の親友であるという。その他、ご商売先きの方、ゴルフ友達の方々があっちの円卓にこっちのテーブルに。

うれしいではないか、こうした人たちが集って、形水氏の古稀と句集刊行を祝って旧交を温めるというのだから、形水氏にとっては正に云うことなしである。ほんとうに形水さん、おめでとうございます。

出席名簿など、句会入選句編集のため岳人さんが持って帰ったため資料薄だが〃川柳展望〃の時実新子女史、日川協事務局長の大井正夫氏、〃京かがみ〃の福永清造氏、伊藤入仙氏や田中秀果氏。番傘の岸田万彩郎氏、西村芳川氏、ふ社の森永良氏、室田千尋氏、少し遅れてご出席の〃川柳文学〃の堀口塊人氏等々和やかなお顔がずらり会場の円卓を囲んでくださる。川柳ってありがたいなぁと、つくづく形水氏も感無量だったにちがいない。

―一〇六氏のご出席である。竹原の山内静水氏や倉吉の奥谷弘朗氏も駈けつけてくださった。スペースマヒで申しわけないが、あまり大きくご紹介できないのが残念である。

まず中島生々庵主幹のお話から―西洋の諺

に「男の最善の財産は〃おもいやり〃に富んだ妻である」という言葉があるが、思いやりのない妻は一本の木もない夏山のように味気ないものである。という解説がついているとのことで、形水氏ご夫妻の仲の良さは句集の中に躍如としている。

藤村青一氏というよりここでは高鷲亜鈍氏とよぶほうが親しみがもたれる。—氏と形水氏の仲は「谷町」の跋にあるように兄弟のような間柄である。悪ぐちを叩くといって登壇されたが、やはり友情がにじみ出ていた。古稀のよろこびより句集刊行のほうにウェイトをおくと、この人らしかった。

来賓の祝辞をいただく。日川協事務局長の大井正夫氏は、ふ社お家芸の全国作家年鑑を整理中の橋本言也氏が形水氏にお力添えをいただいたことがあると、記者も初耳のことだった。

堀口塊人氏へ京都の入仙氏が電話で「句集の名は〃坂〃がよいか〃谷町〃がよいか」と聞かれ、そりやぁ〃谷町〃だと云ってしまってから、石ころの多かった谷町付近の坂を思い出し〃坂〃のほうがよかったのではないかと反省しています。と。

形水さんが—谷町は丁稚車にきつい坂—一流の雰囲気コニャックなめながら—などを作っていたのに、入仙さんは—大阪の北と南を遊びわけ—や、OKの女を連れて握りずし—など作っていたから、形水さんは紳士服の社長になり、入仙さんはあまり大きくない天婦羅屋の店主になったと笑いを誘われる。

福永清造氏は—川柳を向上さすためには川柳人が社会的にもえらくならなければならない。形水氏のような方がドンドン台頭してほしい。

岸田万彩郎氏は—形水さんは温厚な方で、それでいて商法にも長けている。まったく立派な方である。少年時代、私も坂で泣いた思い出があります。

ここで薫風氏から形水氏へ諸氏から寄せられた祝吟の束を手渡された。そして川柳塔社常任理事会から直原玉青先生にお願いして彩筆をふるっていただいた記念品の絵画一点を贈る。花束贈呈は宮西弥生さん。

今日の主役、大坂形水氏は多くの方々から祝福をうけ心からの謝辞をのべられた。

席題「谷町」をトップに、いよいよ句会はクライマックスを迎える。実力派の女性軍の進出が目立ち、小出智子さんが天と地。高橋夕花、垂井千寿子、藤岡花梢さんらも堂々の天位入賞は見事。

手なれた句会の柳宏子さんや記録の鬼遊さんらの活躍もあって、ハンコを押したように時間どおりに進んでいく。

四階から五階へ舞台がかわる。ここは飲めや歌えの懇親宴会場である。司会が柳宏子氏から薫風氏にバトンタッチ。九六氏のご参加である。薫風氏の清新司会は快調そのもの。

まず生々庵主幹が、会を盛り上げるため牽引車よろしく、天井も抜けよと大声でバンザイ三唱をリードされた。この豪快な声がそのまま「川柳塔」を象徴する力だと思った。

指名された川村好郎氏が起って、オーエスケー川柳会を故白柳さんのあとを引きつづき現在も共に勉強もしていると、軽く挨拶がわりにのべられた。

御礼

残暑のきびしい真昼の句会に、遠く山陰方面からもご出席いただき、懇親宴ともども盛会にしてくださいましたことを心からお礼申しあげます。

各テーブルへいちいちご挨拶に回わるつもりでいましたのに不手ぎわのため、失礼申しあげてしまいました。深くおわび申しあげます。

重ねてこの日のご友情に対し厚くお礼申しあげます。幹事の方々にもお世話になりました。

ありがとうございました。

大坂形水

村田瓢太氏がゼンジー中村の高弟であることは先刻ご承知のことだが、風船から鳩を飛ばして大喝采だ。

西村芳川氏の大阪音頭、室田千尋氏の童謡浪曲、田中秀果氏の江州音頭、山内静水氏の詩吟、奥谷弘朗氏の安来節、光森良氏の勅語など快調。うちでは太茂津氏がひきいる和歌山少女歌劇？の串本節が圧巻。百酒氏の名調〝木遣り〟が出ると敏氏の三三七拍手がフィナーレとなる。

形水氏夫人や令息も出席され、後日の語り草となろう、まことに爽やかなつどいであった。

人はこれを〝形水さんのお人柄〟という。

（不二田一三夫）

三才と軸吟（全入選句は岳人氏編集の句会報で発表）

席題「谷町」　**伊藤　入仙選**

人―合格が決まり谷町まで母と　秀　果
地―谷町で素人うろうろするばかり　智　子
天―出張の予定に谷町入れておき　与　史
軸―谷町で散水電車を見てた汗

兼題「洋服」　**若本多久志選**

人―肩書も服もいっしょに脱ぐ我家　あいき
地―白のスーツに幸せを泌みこませ　清　造
天―窓がわは云わず背広の朝を出る　百　酒
軸―初背広夢は社長になる未来

兼題「島」　**菊沢小松園選**

人―石を切る島に生れて島を出ず　水　客
地―あの人の島です桟橋しかと踏む　寿　馬
天―島に住み天狗の面を信じ切り　芳　川
軸―観光船が出ると遠のく島めぐり

兼題「水」　**正本　水客選**

人―運命に逆ろうて水濺みなく　英　子
地―暫くは匍うてそれから滲みる水　小松園
天―水音もしずかな母の濯ぎもの　夕　花
軸―踏んぎりをつける言葉に水をさし

兼題「形」　**川村　好郎選**

人―尊さは形くずれした母の背な　としよ
地―生きざまに似る蠟燭の片ちびり　水　客
天―子を抱くと聖母の形になってくる　智　子
軸―形だけという結納にある重み

兼題「社長」　**西尾　栞選**

人―考古学好きで社長は船に乗る　岳　人
地―税務署に社長軍手を脱いで会い　入　仙
天―社長より大きい魚拓は隠しとく　千寿子
軸―軍歌しか歌えぬ社長憎めない

兼題「坂」　**大坂　形水選**

人―坂の上の寺にかえって行くいのち　千　尋
地―男坂登りつづけるだけの父　美　幸
天―人生の坂で四角い風にあい　花　梢
軸―大正の詩が聞こえる坂がある

インドネシアの旅

白岩文衛

わが行くはこの雲のはて雲のはて
ガイガーをかざし赤軍おらないか（香港空港）
シンガポール翼の下に日が沈む
時差ボケの四度目の食事たべ残し
タラップからテレビカメラに迎えられ
（ジャガルタ・ハリム空港）
天馬ゆく今珊瑚礁俯瞰して（スラバヤへ）
ショッピング英語ネシア語汗をかき
三十年まだ日本の夢みるや（マドラ島へ向う船中、日本軍の沈没船の残骸に会う）
軍服で来た桟橋をバディクで
カンポンをゆっくり散策やぎ一家
運転手あひるのお通りちょっと待ち
道問えば四五人すぐに来て教え
キュキョーキュキョーキュキョーと警笛鳴らす
タクシーで
木の枝を日傘にかざしお伴です（鈴木中尉自決の地アメス山に登る）

信義の字君は問いにき銃声に（鈴木中尉自決の地にて）
故国へ向かぬ丘鎮魂の石もなし
草蒸して三十三年ただ日照る（同）
香たけばはだしの人もみな拝む
山中でシドーカンドノ、サヤ、ギューヘイ
（33年前のわが兵、アチュ マドフセインなり。抱き合って涙す）
再会はもうなき握手離れない
牛と塩マドラは人間くさい島
プアサ月僕もプアサのカーツアー（今月は回教徒の断食月で、太陽の昇っている間は水も飲まない。）
椰子の水文明の民幸せか
写真機に入り切らない子沢山
椰子の村親にたてつく子がおらず
ひざまずけば戦士のみ墓匂う花（独立の勇将アミン大団長の墓、まっ白いカンボジヤの花が咲いていた。）
ムルデカの血の浸む土を握りしめ（「ムルデカ」は独立の合言葉）
再会の陣地は土民も知らぬとこ
小学生たりし夫人の「海ゆかば」（当時は小学生だったという村長夫人が戦後初めての日本人である僕に歌ってくれた日本語のうた。
椰子の風二十才にかえったふところへ（海風の強いスプルーの地、僕らの兵舎は跡かたもなく、椰子の木のみが生い茂っていた）
見納めのマドラは青い青い島（船中にて）
プルタミヤコテッジ僕は童話の中の人（バリ島）
苦しみの門より入れとチャンデプルタン
神々の島観光の渦の中
ドルと円ルピアが頭でもつれ出し
ラーマーヤナ「細身の処女」を見て倦きず（プランバナン寺院）
ボロブドール歴史の重さにただあきれ
ボロブドール石それぞれの言葉持つ
川柳の仲間のよう似た解脱仏
涅盤仏この石像と眠りたし
幸せをくれるストーバまた触わり
ひしと肩抱いて言葉のすぐに出ず（33年前苦苦楽を共にした戦友ハナフィ大佐と対面）
衛兵の礼受けボゴール教育隊（現在は工兵技術隊となっている）
この部屋にウトヨ、プルノモ、アブドラサジヤド
この部屋は新品少尉の僕の部屋
カナリー樹若い少尉を知ってたか（ボゴール植物園にて）
ムルデカは滅びずあなたの血も消えず（深夜の独立戦戦歿者慰霊式に参列）
新興国の意気三軍の剣光る（独立記念式典に招かれて）
民族の期待へ誓う眼がきれい（士官候補生たち）
ああ日本この青年の眼がほしい
建国を祝わぬ日本の血のよどみ
将軍も若くネシアは若い国
メラプティ独立戦士の挙手の先（メラプティはインドネシア国旗、この旗の下に独立戦争をたたかった。）
底辺の民上げねばとアミン少将（自宅に招かれ歓談、独立戦の猛将、現国会議員）
ミセズなぜ連れて来ぬかと又訊かれ
区隊長わが肖像と対面す（45年独立記念館に若き日の僕の写真が掲示されていた）
「ジャワ原人」僕も学問ない一人（国立博物館）
招宴の主は陸軍参謀総長
参謀総長に僕のネシア語又とちり
将軍が僕に抱きつき離れない（参謀本部次官アブドラサジャド少将は僕の区隊の教え子）
ことばとつとつジヤガルタの夜短かすぎ
東京で会おうと固い握手する
雲の海雲の連山雲のじゅうたん
雲海のその一きれの人の世か
大阪で僕のゼスチャー大きすぎ

ATLAS
アトラス
高級洋菓子・レストラン
本店　洋菓子部TEL
レストランTEL

愛染帖

橘高薫風選

海は青空は青なり敗戦忌　八尾市　大路　美幸
新婚の爆音送る敗戦忌　青森市　工藤　甲吉
大和魂を哭かせる平和慣れ
火の神をねぶたのゆれるときに見る　島取県　清水　一保
台風に政治の穴を見て貰い
人間界の悲恋見降ろす天の川　大阪市　河野　君子
夏が動いて切符一枚掌に余す
一番頼りになるのは私老いぬべし　神戸市　宇佐美和子
薔薇の花一日だけを愛された
恋人のここから先は海の色　広島市　すがかつこ
くちづけの余韻を払う蟬のぬけがら
尾灯去る処女の演技をくりかえす　東京都　山根　白星
追い越してゆくエリートの排気ガス
お先棒かつぐアンテナ背なに立て　今治市　月原　宵明
よい腕を持って素面の時がなし
まだ若さ少し残っていた軍歌　唐津市　新岡回天子
宝石を買うに釣銭などいらぬ
お年にはあやかりたいと世辞でない　鳥根県　角　耕草
祭笛あれが百姓とは見えず
コンバイン鎌もやっぱりさげてゆく　富田林市　中村　優
ろうそくが揺れて霊魂不滅とかや
鈍行でペンの行方の旅日記　神戸市　和田　恭子
夜霧湧く絵ざら一枚砕くべし
源聖寺やさしい坂は姑に似る　鳥取県　鈴木村諷子
作物を培い人間性を培い
従姉妹会つくる話もそれっきり　伊丹市　樫谷　寿馬
はらわたの深くに秘あり真珠貝
少し善がある美人画のモデル　京都市　山本規不風
太陽の如く我が家のお墓です
民宿へ警官が来て喜劇にす　大阪市　神谷凡九郎
綺麗やときっと自分で思てはる
彼と居ればやっぱりアンタ女やネ　八尾市　宮西　弥生
酔いすこしまわると才女火を見せる
泣きごとは素直な女に許される
幸せすぎて風鈴を三つ買う　大阪市　小出　智子
暑いばかりでもなさそうな午後の街　岡山市　川端　柳子
優勝旗寄せては返す波があり
札束を数えて真心待ってます　名古屋市　越村　枯梢
円周をはずれてみたい長い旅
ポケットのばら銭お前も泣き虫だ　八尾市　高橋　夕花
まっすぐに癒えた足から天地の恩
古茶碗胸に捨てたきものがある　富田林市　岩田　美代
カンカン帽古い諺生きて来る
計算器の答は信じる寒い顔　岸和田市　池田香珠夫
マネキンを脱がせ着てみて買わず去る
ジーパンの砂がお寺をワヤにする　堺　市　高橋千万子
無縁仏ある日紳士が花をさげ
美しく別れ今だにたぎるもの　室戸市　石建よしみ
汗ひとつかかず正座の花芙蓉
盆の火は赤く燃え思いこもごも　唐津市　三浦ひろ坊
えらいさん皆黒塗りの乗用車
タクシーに押しこまれたは覚えてる　寝屋川市　小林鯛牙子
花火垂れる邂逅のおのこらに　羽鳥市　伊藤　静枝
誕生日祝うて酔えず原爆忌

藤井寺市 中原比呂志
蛇だって恐さは同じ薮すすむ

倉敷市 中田 圭子
快眠快便靴に片チビ癖がある

出雲市 高橋可保留
下張りの新聞戦果華々し

大阪市 北 勝美
コンパスで描けば味気のない丸さ

寝屋川市 江口 度
縁側でがまと向き合い電話まつ

高槻市 若柳 潮花
貨車がゆく風に揺れてる女郎花

鳥取市 河村 日満
金色に弱い素質をのぞかれる

出雲市 板垣 夢酔
愛人と言われぬ恋へ身がやつれ

倉敷市 水粉 千翁
千翁さん呼んでと孫に泣かされる

倉敷市 中島 彩平
俎板のくぼみも愛の深さほど

唐津市 岩崎 実
老杉の穂先きの枯れは天をつき

伊勢市 山本 光男
柔らかくなる放浪の晒し首

岡山県 岩道 博友
苦労した軍歌だけです僕の唄

今治市 越智 一水
草も木もうたうよ原爆許すまじ

和歌山市 松原 寿子
美しい語尾あたためる玉手箱

和歌山市 西山 幸
悪役がこなせずランクまた下がり

貝塚市 行天 千代
夢多き青春バイトもたのしんで

兵庫県 遠山 可住
時計見る時に男の恋がさめ

旭川市 朝倉 大柏
乳房持たぬコンピューターの子守唄

大阪市 江城 修史
今日生きる汗の視界に蝶が舞う

羽曳野市 麻野 幽玄
老いらくの恋つつましく踊りの輪

川西市 戸田 古方
白みはじめて蛙が蟬に負けるなり

和泉市 西岡 洛酔
蹴り上げた石の痛さに淋しい日

倉敷市 斎藤 通風
冥土行き俺には壁画が残るまい

唐津市 田中 紫浪
マイナスになろうと酒は俺の友

大和郡山市 森田カズエ
愛染かつら歌う母あり元ナース

東大阪市 斎藤三十四
糖尿の茶碗小さく替えられる

倉敷市 藤原 桜山
クレヨンの色が足りない別離の絵

大阪市 西村 花村
シルエットしわも白髪も気にならず

尼崎市 黒川 紫香
すだれ巻くとそこまで秋が来てそうな

鳥根県 佐々木 裕
過疎村の和尚の辞儀の低き事

寝屋川市 柴田恵美子
天皇が何かなさる日は晴天

米子市 小西 雄々
ゴルフ場でると募金をうるさがり

鳥取市 中森葉士人
杖よりも短かき影の横断路

松江市 黒目 大鳥
鐘の音の余韻へ匂う富貴の花

唐津市 田口 虹汀
水飢饉泥縄式の計算器

鳥根県 堀江 芳子
心臓を確かめながら子の看護

藤井寺市 西 いわを
仏壇にグラジオラスの花真赤

鳥根県 小砂 白汀
逆立ちでここまで歩いて来たような

大阪市 新川 貞祐
ものかなし若きに媚びる古い人

大阪市 那須 鎮彦
ざくろの赤ばっくりとのど渇く

和歌山市 若宮 武雄
名は性を月下美人に極まれり

倉吉市 奥谷 弘朗
ものたのむ時はアンタを使わさる

鳥根県 岩田 三和
絹糸で夫婦の傷を縫い合わす

大阪市 川口 弘生
憶病な男が守る女王国

新宮市 大矢 十郎
復員を語ればロックの音を上げ

今治市 矢野 佳雲

住む人を偲ぶ泰山木の白　三重県　坪田　冬花

禿げたなら良いではないかアデランス　倉敷市　小幡　里風

大の字がバカと叫んでみる天井　和歌山市　津田　与史

お多福を集めて友は満足す　岡山県　直原七面山

四海波静か四女も今日嫁ぎ　名古屋市　大林曲ん手

縄を綯うことのみ老いの掌に残り　倉敷市　大森　登竜

寄添って囀る小鳥愛たしか　鳥根県　堀江　正朗

音聞いて従いて行けないもどかしさ　米子市　佐伯　越子

三日目の離婚親族あきれさせ　羽咋市　三宅　ろ亭

女みな美人に仕立て秋が来る　京都市　都倉　求芽

星が降るだけでも来た甲斐がある日本海　大阪市　白石　潔

へその型にもよし悪しがあるビキニ　米子市　石垣　花子

空破る花火へ波も音ひそめ　呉市　山根喜代美

美人を自負合せ鏡に怯える日　大田市　藤田軒太楼

月を背に巡視を終えた安堵感　唐津市　山下　勝一

夏痩せもせず御多忙なロッキード　山口県　高崎　雀声

無理矢理に権利を生かし訴える　大阪市　欄　蘭

懐しさが先にあいさつ後廻し　唐津市　桑原　掬治

仕掛け花火に子を抱き上げる親心　東大阪市　竹中　綾女

蟬しぐれまだ公害の無い安堵　八戸市　小泉　紫峰

友を待つビールが冷えて枝豆の色　東予市　小山　悠泉

気まぐれに伸ばした髭をほめられる　京都市　松川　杜的

毛筆の持ちよも日・中ちと違い　岡山市　砂田　静佳

せっかちの自動扉は手で開ける　今治市　園部　正則

はかない運命に死ぬ時もゆり籠にゆれ　枚方市　宮川　珠笑

ふるさとに近し夜行の蚊に喰われ　平田市　久家代仕男

恋不倫影絵が泪拭いている　八戸市　島田　昭治

秒針に笑われそうな今日の僕　岡山県　出原　敬一

島蔭の二人僕にもあった過去　岡山市　井上柳五郎

署名をと書道展に金釘字　松江市　梅本登美也

カラオケも共に偉大な死を悼む　唐津市　桧垣　岩光

水引へ親類縁者多過ぎる　宝塚市　吉田　笑女

あじさいの一輪夏の陽に残り　西宮市　朝山千世子

雲の峯ひまわりの闘志球児にも　寝屋川市　宮尾あいき

レモン一かじり新しい血がかけめぐる　鳥根県　飯塚　虎秋

ちぐはぐな音を福耳聞き流し　長崎市　村崎　三車

遺稿集今日も徹夜で編みつづけ　鳥取市　北野　天人

外敵へ卵を守ってたじろがず　岡山市　串田句眛地

嘘一つ視線たじろぐ三面鏡　唐津市　筒井　朴竜

蝸牛歩巾も嬉し子の貯蓄　倉敷市　中津伊勢吉

クーラーは病に障ると負け惜しみ　岸和田市　清野　こう

棚一つ西瓜が占める冷蔵庫　岡山市　清水金太郎

正直に言って縁談纏らず　岡山県　池田　半仙

黒眼鏡陽がまぶしくて掛けるのか　出雲市　園山　栄

舟を捨てあがった陸も荒れる波　鳥根県　山根　峰雪

よくもまあ生かされて来た七十年　辻　文平

鵜になっていたと気付いて平和なり

秀句鑑賞

―水煙抄―

―前月号から―

野村　太茂津

赤ならば炎えたぎるような赤がいい
原色を着れば心が癒えるのか
幸せな死ならば君は死ねるのか

川上　富子

「よな」が引ッ懸かるが……。

「赤」の好きな人の性格、㈠生活が旺盛。人生の楽しみを求め享楽してゆく。㈡感情が激しく、からかったりするとなぐられる。㈢男ならフットボールの選手になれるが、碁、将棋等は駄目。必要な鋭敏さ、忍耐力とか、物事に専心する能力はもち合わさぬ。㈣他人の感情を踏みにじることもやりかねない、しかし他人を鼓舞してゆく人。㈤生涯の伴侶は、「青」か「緑」を好きな人をしっかり摑むこと。作者はどうやら自己を見究めたようだ。

幸せな死ならば……死ねるのか。問いかけか、自問か、呟いているが、「死ぬときは独りそれでも欲しい愛」と云う某の句もある通り、幸せを持って死ねることは素晴しいではないか。

聴えないけれどとに角ハイと言う
自惚れがまだ少しあるネックレス

北野　久子

作者はどんな原因か知らぬが全然耳が聴えない、人の語りかけに全身を耳にして聴きとろうとする、そして表情をじっと視て笑顔で「ハイ」と言う。私はこの句から何故か胸の奥底からこみあげる感動に打たれた。だから「自惚れ……」の句は私ならばネックレスを「イヤリング」にしたい。

行きずりのジョークに一日捕われて

浦野　和子

余程愉快なウィットに富んだジョークに出合ったものだ、友達と歩きながらの一日明るい話題の種にする。「捕」は「捉」であろう

母がほし唯母がほし孟蘭盆会

辻　文平

川柳は言い切って了えば方程式になる、しかし、この句の余韻は高い。作者の思いが強く韻いてくる、きっと慈母そのものだったのであろう、真実味の佳吟である。

命賭けた道に道標など置かぬ

牛尾　緑楼

人生に良しと言う字が見当らぬ

板垣　夢酔

道しるべがあったから、その道の方向を撰んだのではない、自己の生命を深く深く見つめた末に行くべき道を決めたのであって、命を賭けているのである。夢酔さんは又当然、「これで良し」とは言いきれないのであろう人生には確かに完全無欠これで良しと云うことはない、だから人生は楽しい。

父の日は鼻毛を抜いていたい父

岩倉　天彦

じっとしているのに小石蹴飛ばされ

原田凡太郎

「父の日」だけ、ちやほやされたくない、そっとしといてくれ、と云う、同感。凡太郎さんは、えらい災難に遭ったものだ、運命のいたずら、避けられない宿命を詠んだ。

古本のように時たま引き出され

田中善四郎

気に掛けていてくれるかよく叱かり

岸本豊平次

「古本のように」とは言い得て妙、私もこんな老人になりたい、古本ご本尊も又うれしいことだろう。私はよく褒めるが時たま？叱る、これが育てるコツであろう。そして又叱ってくれる友が居る、「自惚れ」にはまだ叱る余地はあるが「思いあがり」には手もつけられない。気に掛けて居ればこその愛の鞭であり、作者は叱られて嬉しいのである。

田の神も怒る瑞穂の青田刈り

筒井　朴竜

早刈りへ身を切る思い強いられて

伊藤　静枝

農政へ怒るをぶつける、米作農家の叫び。

嫉妬する今日の私は若返り

小谷　葉子

女は嫉妬するから情熱が炎えて若さを保つのであろう。しかし男の嫉妬はいただけぬ。

前号の「の」と「に」について

野村　太茂津

（一）人の物たゞ遣ルにさへ上手下手
（二）人に物たゞ遣ルにさへ下手があり
右の句「の」「に」について私の調べたことを申上げます。
岡田甫先生校訂（三省堂版）による俳風柳多留全集一自初篇　至一三篇には
◎人の物たゞ遣ルにさへ上手下手（万）（拾）（下手があり）（拾）
手から次第に〳〵
とあり、
（万）……は万句合。（拾）……は柳多留拾遺拾篇（古今前句集改題）
岡田甫先生はこの本の序文の中で
岡田三面子博士の初版本蒐集
島根大学文理学部教授水木真弓先生の川柳評万句合、「柳多留丁数考」
水木先生没後、令弟水木直箭先生の監修、助力による。
今回の出版に当り、校訂者架蔵本に加うるに七久保博、八木敬一両氏の蔵本の中から初版本を選りすぐった。
以上の理由からいっても、本全集は現在望み得るもっとも正確、かつ厳密な校訂本であろうと自負するものである。印刷の校正にも厳密を期する為に鈴木倉之助氏を専任に、八木敬一氏、佐藤要人氏の二人を補充原本校合も四名を当て完璧を期した。
とあり、
以上から押して、私は二句双方とも、可とすべきではあるが、
人の物たゞ遣ルにさへ上手下手が正しいと判断します。
しかし、念の為、岡田甫先生に直接もう一度お教えを乞うて確めたいと思います。
現代の読み方から考えれば「に」……上手下手〃の方が私には納得出来るのですが……。
路郎師の解説を味読、そして「の」……上手下手〃を舌頭千転してみると師の解釈、解説の意味も解けてきて、正しいと信じられますが……。

岸　南柳氏（大阪市理事）急逝

九月十七日午前三時半死去、九十一歳の最年長者だった。十八日に自宅で盛大なる告別式が行われ柳人多数参列。―合掌

摩訶不思議柳縁奇譚

菊沢　小松園

八月二十七日の大坂形水古稀祝賀と句集、谷町発刊記念句会は各柳人の賛同の下に我が川柳塔社の主催で行われ近頃の麗しい句会で印象深いものがあった。詳細は何れ他の健筆家によって書かれることだろうが当日、数多い遠方の柳人の中に山陰倉吉の柳人奥谷弘朗氏があった。本月五日、岡山駅の出来事で本当に一瞬の間であったが何時までも忘れ得ぬ深い感銘であった。
それは当時午前十時三十五分我々川柳塔有志一行が鳥取のうみなり川柳三十周年記念句会の迎う新幹線を降りて伯備線に乗り換えてふと見ると我々が今降車した新幹線のホームから、しきりに手を振り顔を綻ばせてこちらの窓へ叫んでいる人がある。弘朗さんだ。奇遇に夢かとばかり驚いた、皆振り向いて気が付いて栞さんも手を振る雀踊子も手を振る

岳人さんも私も一方の窓へ一勢に顔を揃えて声を上げた向うも奥さんと双んで何度も何度も頭を下げている。それは本当に何分間の一瞬の出来事であっても心に残る温かい情景であった。向い側のホームと言ってもなかなか声の届く距離ではない、手を振り顔を向けるだけの一瞬のすれ違いの対面で人生には斯うした劇的な場面もあるものだと感じました。

列車が出発してからも皆、話題がこれに集中しました。時間と場所を設定してもなかなかに逢えない時もあるのに偶然にしても不思議な柳縁に腑に落ちない程のショックでした。それは以前より「不如帰」の浪子と武夫が東海道線で擦れ違う場面がありますが、五十年以前に読んだ当時よりなかなか合点がゆかず、名作と言われて人々に膾炙した「不如帰」も病気の療養に帰る浪子、戦地へ向う武夫東と西の擦れ違い、このような偶然があるだろうか、文豪芦花も余程設定に苦労した処で窮余の策だったのだろうと内心腑に落ちないものがありました。大正や昭和初期にはまだ縁日などにあった所謂のぞきからくりの「ほととぎす」に〝エーエ上りと下りの擦れ違い二度と逢えない汽車の窓、伊香保の山の蕨狩り、逗子の浜辺の貝拾いなみだなみだの物語り〟こんな哀調の文句を聞くたびにこの場面のみ合点が行かなかったのが、今「人生は小説よりも奇なり」を地で行った実際に当って多年も難問も氷解し芦花はやっぱり文豪だと思い返しました。勿論昔の汽車は速度もゆっくり擦れ違ってもお互い顔まで見えたのかも知れません。斯んなことを形水さんの句会の席で御当人と語り合って当日の感激を語り合いました。以上、故鮎美さんならぬ柳像柳魂物語りのてんまつ。

雅号ぶっちゃけばなし（173）

ようよう　りょうがわ

両川　洋々

国鉄職員（三十五歳）

両川洋々―高校時代から川柳の世界へ飛び込んで、家内と知り合うまでは本名を名乗ってたが当時恋愛中だった世話強い美女?が、そろそろ雅号付けたらと三つ考えてくれた中の一つが「洋々」で、自分勝手に前途洋々にもつながるからと惚れ込んだ挙句、妻と雅号を一緒に面倒見る破目になって十年目。そろそろ新しいのに乗り替えようかとも思うが、一緒になる時吐いた言葉が「別れる時は雅号も返上」。今になれば雅号の方に愛着を感じて別られず、かろうじて離婚防止にも役立っている。呼名は相変わらずの大声で初めての方はビックリされるらしく、びっくりしたついでに、「洋々」を覚えて貰っている感じ。本名は洋。

文通

三宅不朽選

外国の切手がほしい文通で　凡太郎
珍しく子からの便り金の事　掬治
ペンパルで世界平和の輪をひろげ　芳山
文通を始め英語に強くなり　博友
文通で余生いたわり合う旧知　本蔭棒
達筆と文通をして肩が凝り　菁居
文通に無口がこんな事も言え　洛酔
絶えていた友情文通取り戻し　多賀子
三通目恋と言う字も書いてみる　岩光
文通の逢わない方がいいのかも　一路
手紙ではじやじや馬だとは思えない　方大
仕方なく文通相手が望むから　七面山
嫁がせて母がせっせと書く便り　思月
雨の日の父の便りへ折り返し　大柏
途絶えてた文通復活さす選挙　右近
一度だけ会って文通それっきり　洋々
文通の相手美人と信じてる　保子
返信に向うも一句添えて来る　暁明
ペンフレンド写真交換まででした　潔
文通が疎遠になって時の人　方大
文通でやっとデイトの線をだす　里風
葉書から封書へ恋の急ピンチ　悠泉
代筆で来た文通にある不安　英詩
文通をきっぱり断って嫁くと決め　代仕男
着便の時間かかさず開けて見る　通風
文通を電話で軽く確める　善四郎
文通が凶器となった週刊誌　御前
出所後に少女を食べる文を書く　弘生
平仮名の文通宛名はママが書き　忠三
分校の便りせせらぎのせてくる　カズエ
文通の今でも渾名書いてくる　素身郎
文通を離婚の席へ持ち出され　夢酔
文通の愛を電話で確かめる　寿馬
文通の不安もまじる待ち合わせ　保夫
父の日に金では買えぬ娘の便り　虎秋
速達で届く便りの尚温し　ますえ
文通へ二人の過去を引きもどす　美保子
お互に何時か焼かれる便り書く　無人
メヴィウスの輪から翔べない文通で　かつこ
父と母の恋文わが家の文化財　ひろ坊
不足料とられても嬉しラブレター　芳仙
文通で少年Aの目が開き　光男
待ちに待つ便り猫にも声をかけ　伊津志
良縁をペンフレンドが持って来る　虹汀
文通のまだ年令に触れていず　佳宵明
ハガキなら文通しても良いという　三和
文通の出来る私人間さまやった　古方
身障の壁を支えている文通　静枝
こんこんと諭す文通にないかしこ　無聖
文通の窓にはるかな月がある　人可住
文通で育てつづけていた虚像　地凡九郎
寝たきり同士こんな夢書いてくる　天古方
ああ書けばこう書く文通資料を寄せ　軸

鉄道

間嶋青丹子選

鉄道に今日も別離のベルが鳴る　勝一
SLの最後をカメラ追っかける　悠泉
鶴嘴に線路工夫の汗光る　三車
鉄道の値上が痛い旅カバン　多賀子
鉄道の地図手放せぬ旅行好き　カズエ
汽車ポッポ祖母の子守は駅広場　伊勢吉
グリーン車のデッキを借りて降りる見栄　岩光
手を挙げりや止まってくれそなローカル車　裕
軍需品運んだ鉄道に子ら無心　天人
足が地についてる鉄道やさかい好き　古方
ふるさとへもう十キロの汽車がない　暁明
収人とは別です政治路線敷く　洋々
籠さげたおばさん一人乗る小駅　耕草
鉄道がつく噂にも地価跳ねる　本蔭棒
新幹線詩情飛ばして秒刻む　美保子

川柳塔柳箋
一冊百五十円・送料二百円

枕木へ歩巾を合わすストの朝　勝美
鉄道のストを尻目にペタル踏む　某人
トンネルを抜けて故郷の波の音　虎秋
故里が近し列車の国訛り　優洛
SLの気迫還暦物とせず　酔保夫
解体の部品マニアが買い占める　博友
鉄道の歴史を変えた政治色　夢酔
鉄道の赤字の詩はペンペン草　栄女
鉄道が赤字背負ってきしむ音　綾七面山
駅ブーム過ぎると元のさびれ駅　句味地
ふる里の駅長鉄道の草むしる　芳仙
コスモスの花に降り立つ無人駅　ひろ坊
廃坑となって鉄道の錆びたまま　代仕男
鉄道のレールのように交らず　七面山
終発の汽笛に句集のページ折る　彩平
鉄道に地蔵が出来て手向け花　右近
鉄道で町を二つにひき裂かれ　宵明
父の居る踏切小さく笛ならす　寿馬
国鉄と言う癌手術も出来ぬまま　どんたく
殉職の鉄道に鈴蘭匂う頃　比呂志
鉄道に沿って安堵の下山する　佳雲
食慾をそそる周遊券が売れ　人

吟題課

母の待つ故郷へ徹夜の乗車券　思月
切符には喜怒哀楽と書いてない　枯梢
鉄道で表と裏の街が出来　無人
金婚の旅は周遊券にきめ　軸

貯蓄

国弘半休門選

八桁になった貯蓄で家を建て　春日
黙々と小銭を貯めて居る給仕　彩平
蟻冬に備えせっせと貯蓄する　登美也
貯蓄する子は好きなもの買うつもり　雀声
はげんでる貯蓄へ金利又下り　信二
社内貯金引き出す理由見つからず　保夫
子の貯金親の通帳のなしくずし　佳雲
どうしても解せぬ平均貯金額　不二
隣組旅行貯金もして和み　近江
蓄めるこつ聞けば節約せいと言う　悠泉
貯金して子無し夫婦に物足らず　無人
子の名儀貯金に賭けるデカイ夢　里風
腹の虫によく言い聞かせとく貯蓄　伊津志
生き甲斐を貯蓄にかけた夫婦像　栄
寝ころんで貯蓄の手引読んでいる　カズエ
勤務先からも貯蓄を強いられる　七面山
集金に来るので月掛だけ残り　伊勢吉
ささやかな貯蓄を嫁いだ娘がねらい　素身郎
貯金など出来ず都会の灯にこがれ　健太郎
噂ほど貯蓄案外しておらず　夕路
おろさない子供の貯金あなどれず　晩明
目減りなどさすかと貯金で家を建て　洋々
貯金から生活のリズム狂い出し　保子
欲望を切り捨てている預金高　美保子
アメリカへ行きたくなった貯蓄高　重人
あどけない貯めた一円振って見せ　隆子
貯金箱子供の夢がつめてある　勝美
余白多い通帳ばかりつくってる　規不風
頼れない施策に構え貯わえる　貞祐
欲しいものばかりで貯金すっからかん　木魚
頼る人ないからハイミス貯めている　思月
貯蓄家の金の恐さを知って貯め　茶人
明日のことわからないから貯められる　方大
貯めている気配野良着をいつも着て　耕草
未来図の画布は貯金の彩を塗る　一路
ドル貯めた汗を世界にいじめられ　可住
金のない惨めさ知ってから貯蓄　代仕男
安心を貯えて行く貯蓄　どんたく
子宝が私の貯蓄と慰める　凡九郎
貯蓄などないが青春燃えている　深星
こんな利子と持っているものだけ怒り　ろ亭
蓄めるのが怖い蓄めとうなりそうで　古方
貯めこんだらしく笑いに巾をみせ　軒太楼
貯蓄して人が救える血を献げ　軸

東大阪市文化祭川柳大会

十月十日正午開場（前号参照）

初歩教室

題 ―「誇」―

本田恵二朗

精農家と呼ばれる人は、たとえ一と坪の畑であっても、それを如何に肥し、活用するかを考えて、収穫を豊かにするであろう。

川柳の心の畑も、その開拓の能力差があろうが、能力差は習練の積み重ねによって、必ずや縮めることが出来る。たかが趣味に過ぎないと安易な考え方では前進は無い。

生涯の趣味として川柳を選んだ限りは、負けるものかというファイトがなくてはならないし、血みどろの努力がなくてはならぬ。

達吟家と呼ばれる人は、なんの苦労もなかったかのように、謙虚で、にこやかな態度でおられるが、或る期間、血みどろのあけくれを体験しておられるにちがいない。それなくして達吟家の域に到達できるはずがない。私はそんな達吟、精吟家に敬意を惜しまない。

誇りにもならぬ戦歴生きている　可保留
（誇り高き戦歴の彩あせてくる）
先輩の誇りかぶって胸を張り　頼次

子の誇り親がそっくり頂戴し　同
（子の誇り親馬鹿鼻にぶらさげる）
家柄を誇って良縁また逃し　梁川
ご先祖の豪華を誇る屋敷跡　同
（十五代の家系を誇る屋敷跡）
肩書は無いが心にある誇り　保夫
息子自慢無学の父が持つ誇り　同
（鳶が鷹生んだ誇りを秘めて老い）
聖職の誇りも赤い旗で覆う　柳五郎
（聖職の誇りが赤く赤くなり）
老残国七洋制覇も過去誇り　同
（老大国七洋制した誇り秘め）
毛並よいだけが誇りの御曹司　慶彦
（御曹司毛並のよさを鼻にかけ）
（御曹司の誇りは毛並だけである）
伝統の味と誇りを古のれん　同
（古のれん誇りの味で生き続け）
国訛り郷土を誇るおてもやん　九二老
（国訛り楽しく誇るおてもやん）
あぢさいの誇る色さえ見せず褪せ　同
（あじさいの誇り美事に七変化）
兄ちゃんの誇り弟より高い　伊津志
（あじさいのさも誇らかにころも替え）
（末っ子の誇り一番脊が高い）
辛勝の校歌誇りを新にす　同
鯉のぼりわが家に誇る孫がいる　御前
倒産の誇り空しくほこり積む　同
（誇り空しく倒産のちり積る）
喪服着た日から誇りのない女　利美
（喪服着た日から女の誇り捨て）
子に誇るものはなくてもマイペース　同
（子に誇るものなし真すぐ歩くのみ）
父の十指ゆるがぬ誇り持っている　幸
（老父の指ゆるがぬ誇り物語る）
酔えば出る誇りの消えた勲章で　同
（酔えば出る誇りの褪せた勲五等）
子の為めに女の誇り母は捨て　深星
（子らのため女の誇り捨てて老い）
子には子の誇りを母は知っている　同
（子の誇り母なればこそ知っている）
誇大広告お目出度いのが引っかかり　善四郎
国富みて誇る日本が円に泣く　同
（高度成長誇り過ぎたか円に泣く）
貧乏に耐えて不況の誇ら顔　句味地
（貧に耐えた誇り不況の風知らず）
真実の嘘は誇りにして喋り　同
（ほんとうの嘘は誇りげに喋る）
赤は赤白は白なり咲き誇る　無人
いずれ皆衣裳を誇るお茶の席　同
（お茶席は誇りけだかき衣裳展）
誇りを捨てたり冒険がしたくなり　紀久子
つつましくだけど誇りは胸に秘め　同
（謙虚さの胸に誇りを秘めている）
誇りもて勝つも負けるも甲子園　湯川　頼次
（甲子園勝つも負けるも誇らかに）
釣天狗逃げた鯖が鯛になり　同
（釣天狗逃げためばるを鯛にする）
誇らかに亡父を語る老いし母　天人
（亡父を誇るとき老母の目生きてくる）
誇り高く生貧て貧に勝てずいる　同
半生の誇りは誠実だけの僕　昭治
社の誇りトイレがきれいもその一つ　同

名門を誇る球児の意気もえる　静江
中世に権力誇る墓石立ち　同
（中世に権を誇った墓の苔）
鵜匠舟世襲を誇り綱さばく　同
（世襲を誇る鵜匠の綱さばき）
染め色を誇張して描く余生地図　露杖
あきんどの誇り信用ゆるぎなし　同
（ゆるぎない信用あきんどの誇り）
誇らしい顔で水まく門構え　三和
神楽面誇る手さばき太鼓打つ　同
（神楽面伝統誇るバチさばき）
（伝統を誇る神楽の笛冴える）
誇張した手前寄付帖ことわれず　静佳
清廉を父の誇りに朝の靴　同
（清廉を誇りに父の朝の靴）
分身を誇りにママのよい寝息　英子
真すぐな亡夫を誇れる一周忌　同
（真すぐだった亡夫を誇る一周忌）
実家帰り大きいお腹誇らしげ　同
（八カ月腹を誇りに里帰り）
日本人に生れし誇り持ちいるや　瓢太
（日本人に生れた誇り知るや君）
両親を誇りと思う子らがいる　同
誇大妄想頂点におらねば気に入らず　同
毎朝のマラソン古稀の誇りにし　三十四
（朝毎のマラソン古稀の誇りとも）
誇りある人生などはない　同
（誇りある人生なんてまぼろしよ）
誇りある男は顔を二つ持ち　同
（誇り高き男に顔が二つある）
誇り捨ててから貯めている　同
（誇りを捨て切ってからもりもりと貯め）
壇上の人の袴張に目をつぶる　貞祐
誇れたは硬軟プラン湧いた頃　同
誇る気も競う気も失せ傘寿前　同
頑健が誇り憎まれ口をきく　同
（投句のきまり＝葉書に五句以内）

題——役——10月20日締切（12月号発表）

宛先　岡山県倉敷市下津井一—九—三四
〒七一一　**本田恵二朗**

川柳塔社常任理事会（九月四日）

この日、五十三年度二賞決定の日である。緊張して早目に出席する人、いつもと同じようにノンビリ出てくる人、いろいろ人間の型があっておもしろい。

川村好郎氏と若本多久志氏が病欠。正本水客氏がハワイ旅行中とあって、路郎賞の選考委員は西尾栞、菊沢小松園、橘高薫風の三氏だけである。

川柳塔賞の方は黒川紫香氏が水客氏とハワイ旅行中なので、戸田古方氏と大坂形水氏で決めることになった。

例年ならAの方が六氏、Bの方が三氏だが本年はAが前記三氏、Bが二氏、つまり五氏によって選考され、それを生々庵主幹が断を下されるわけである。本年もこちらで無記名の九推薦句を書き、主幹に提出、ここで息づまる瞬間を待つのである。

下馬評の高かった鬼遊氏の〝障脳よ〟が準優秀作第二席になり、美代さんが二句推薦されながら、そのうちの〝菜を漬ける〟が準優秀作第一席にとどまった。—結果的には残るべき人が最後まで競い合ったという感じだ。

川柳塔賞の方は、相当に難航したように思われた。三氏の提出句をあとで見ると、消したり生かしたりした跡が生ま生ましく原稿用紙にそれがにじみ出ていた。

川柳一年生の北野久子さんが、順位からいって第四位で入賞は逸したけれど、期待のもてる人の台頭がたのしい。

病欠中の多久志氏へ、薫風さんが二度も公衆電話へ走るなど（夜間の本社の電話は不通になっている。夜間の電話は不二田宅へ）の一と幕もあった。

出席—古方・生々庵・栞・潮花・薫風・文秋・萬的・太茂津・与呂志・岳人・一三夫。（敬称略）

（F）

川柳塔社同人の胸にかがやく
シンボルバッジ

一個　千百円
（送料共）
女性用のもあります。
川柳塔社

第三百二十七回（五十三年度第九回）

大萬川柳

「はずむ」

入選発表

選者　川村好郎

投句総数　三百三十六句

入選　五十九句

月が出て心はずむか虫の声　大洲　暁明

つまずく日はずむ日寡婦にある峠　堺　千万子

逢いにゆくはずみをかくしようもなく　鳥取　静泉

はずんでる心をうつすコンパクト　東大阪　美子

チップはずんだにお膳運んだだけのこと　藤井寺　吸江

赤いバラはずむ心を活けて待つ　堺　憲祐

はずませるボトルがあって二人居る　寝屋川　小路

出稼ぎが戻り夕餉のはずむ声　守口　笑風

ハミングで恋知りそめし花を摘む　堺　一二三

お招きへはずむ返事の字も踊り　米子　瑞枝

はずんでる心かくして帯を締め　和歌山　紀久子

双方が次第にはずむよい電話　倉敷　筒子

河内音頭につられてはずむ踊りの輪　松原　サヨ

茶の友へ老いの心がちとはずみ　養面　一本杉

帰郷する心がはずます人がいる　大阪　弘生

はずむ胸押えようもなく待つ帰省　和歌山　光代

はずんでも届かぬ毛毬のひとり言　和歌山　幸

はずむもの消えて老醜増すばかり　大阪　文秋

ほろ酔いの舌のはずみを待つねだり　和歌山　武雄

ポケットに初給料のある歩巾　倉敷　方大

値を聞いていっそうはずむ毛皮ショー　八尾　鬼遊

再出発はずむ夫へ化粧する　和歌山　としよ

はずむもの持って若さを逃がすまい　岡山　たけ志

婚約へ誰はばからぬはずみよう　大田　軒太楼

逆転にはずむスタンド声も嗄れ　橋本　木魚

秘めた愛はずむこころを押えがち　和歌山　頼次

まだはずむものあり残り火手で覆う　神戸　どんたく

叩かれてはずむボールの哀しさよ　八尾　美幸

腕組んではずむ二人へ天高し　倉敷　素身郎

賽銭をはずんでみても同じ音　笠岡　忠三

分別がはずむ心をたしなめる　伊丹　寿馬

寡婦ゆえにはずむ対話を誤解され　出雲　夢酔

靴音にはずんだころは初心でした　寝屋川　恵美子

云いなりになる髪　女はずんでる　富田林　花梢

木せいの匂いにはずむ明日の詩　堺　天笑

封を切るはずむ心が愛となる　和歌山　寿子

お喋りがはずむ女にない時計　交野　テルミ

円高を肴にはずむ屋台酒　岡山　たけ志

はずむこころをスーツケースにたたみこむ　大田　軒太楼

2DKとおさらばをする荷がはずみ　堺　天笑

心中の旅とも知らず子がはずみ　橋本　木魚

はずんでるあかしミシンもリズミカル　平田　代仕男

お喋りがはずんでお里出てしまい　大阪　満津子

大役をことばのはずみで背負い込み

誠意と技術で
世界のために
シャープ株式会社

だみ声もはずむ大漁祝い歌
栄転の荷造りはずむ縄を掛け　今治　佳雲

佳句

思いきりはずんだボーナスこんだけか　宝塚　静馬
償いの旅へ無邪気にはずむ妻　大阪　道子
キッチンの仕度もはずむいい話　鳥根　耕草
孤独でもはずむ土鈴を秘めている　和歌山　英子
はずんでる心貴方に注ぎこぼし　熊本　芳仙

人ノ句

銀行から帰った社長のはずみ声　大阪　誓二

地ノ句

はじめてのデートに母親まではずみ　米子　千代

天ノ句

再会へはずむ心に走馬灯　西宮　百酒

選者吟

あとあとがあり御仏前はずんどく

昭和五十三年度
ベストテン（八月現在）

一　千代　一五、五　米子
二　幸　一三、五　和歌山
三　好一　一三、〇　大阪
四　花梢　一三、〇　富田林
五　憲祐　一三、〇　堺
六　百酒　一二、〇　西宮
七　筒子　一一、〇　倉敷
八　和子　一一、〇　和歌山
九　一二三　一一、〇　堺
一〇　武雄　一〇、〇　和歌山
一一　どんたく　八、五　神戸
一二　文秋　八、五　大阪
一三　静馬　八、五　宝塚
一四　美幸　八、〇　八尾
一五　方大　八、〇　倉敷
一六　里風　八、〇　倉敷
一七　静泉　八、〇　鳥取
一八　鬼遊　七、五　八尾
一九　露杖　七、五　鳥取
二〇　正博　七、五　和歌山
以下略

昭和五十三年度第十一回
「ふれあい」三句以内
締切　十月二十五日
昭和五十三年度最終回
「計算」三句以内
締切　十一月二十五日

投句先
〒593　堺市堀上緑町一―三―七
藤井一二三方　大萬川柳係

句集ブーム

大阪市交通局川柳部の児島与呂志さんも定退を記念して句集を出す予定である。三十二年間奉職されたそうである。（ご苦労さまでした）

句集刊行のことは早くから聞かされていたので、九月の常任理事会の帰りに、

「題はもう決まったの」
「それもあんたに任かせる」
「……〃与呂志〃か〃地下鉄〃はどう？」
「二つとも、よろし」

ということだったが、まだ日があるのでそのうちに句集の題が決まるようである。

川柳雑誌時代から今日まで、ずうっと受付けを引きうけ、時には下足番までしてくれた人である。こうした人柄が、かならず個人句集には、出てくるものだ。

彼は今、句を書き抜いているがぼくの手元へ来る日を楽しみにしている。

人気男のことだから、各方面からも応援の声が大きい。

（不二田一三夫）

高橋操子著
川柳句集「千亀利」
頒価千五百円
送料著者負担
序文　中島　生々庵
跋　西出　漁波
編集　不二田一三夫
サイズは好評「谷町」と同じです。その気っぷ、その度胸、〃女親分〃として名のある人の句集です。とにかく一と味ちがう句集の出現です。
発行所　〒542　大阪市南区鰻谷中之町二〇
川柳塔社

柳界展望

（原稿締切毎月末）

▼中島生々庵主幹は9月10日の西日本川柳大会へ選者として出席されたが、三百余名という盛会。（橘高薫風氏も出席）主幹の当分は川柳関係でお忙しい日がつづく。

▼大坂形水氏の古稀祝賀・句集「谷町」刊行記念句会が8月27日に大阪心斎橋・大成閣で開催（本誌参照）。

▼東野大八氏（美濃加茂市は八月末に陶業時報社を円満退職された。在職十二年余カ月。今後は趣味の道とやきものの世界を満喫される由。—老兵は去る一筋の白い道—大八。

▼53年度文化祭川柳大会は11月3日東京都中央区新富町一の一六の八印刷会館で開催。投句者の題—祝う・ふんわり・食わず嫌い・腹話術・魅惑・こわれ物・回す・てんやわんや。投句締切10月20日（五百円）〒112文京区千石三の三五の三・白倉寿夫方

▼第7回北陸小松川柳大会が53年10月1日午前10時から、小松市小馬出町、小松市公会堂で開催。題—推理・松岡緑朗選—矛盾・岡一と選—いのち・井川紋弥選—傘・橘高薫風選—矢印・藤井比呂夢選—見事・伊藤茶仏選・共選の席題も二句。午前十一時半締切。表彰＝市長賞ほか。会費七百円（投句拝辞）連絡先小松市本町一丁目一〇吉田秀哉宛—主催こまつ川柳社。

▼展望叢書⑤金築雨学川柳集「夕なぎ」が8月に刊行（番傘同人・島根の人）表紙の色と本文の色がとも色で感じがよい。—山陰の風カタカタと人形の首—序文・柴田午朗。頒価五百円・送料別、発行所・川柳展望社。

▼展望叢書⑥園田恵美子川柳集が9月に刊行。（番傘同人・荒尾の人）これも表紙と本文がとも色。母の歴史が重たいいっぱんの帯よ—序文・岸本吟一。頒価、発行所は右と同じ。

尾藤三柳著

川柳の基礎知識（技法と鑑賞）

川柳の成り立ち／前句附の大衆化／川柳評万句合／「誹風柳多留」の板行／文芸形態の確立／狂句への道程／明治の新川柳改革／近代から現代へ

川柳の構造／川柳の発想／リアリズム・写実と穿ち／ウィット／機知と意外性／リリシズム・抒情と内省／川柳の技法／何を表現するか／どう表現するか

川柳創作の実際／句会・機関誌／句会の概略／句会用語課題詠の実際（定価・八八〇円）

（**川柳年鑑作品募集**・一人三句以内＝一年間の作品、受付期間＝九月末日　〒一〇二　東京都千代田区富士見二—六—九　**雄山閣出版編集部川柳年鑑係**）

▽同人の動向△

▼川村好郎氏と若本多久志氏が二賞決定の9月4日と本社句会の7日を欠席されたが、10月8日の同人総会（二賞発表句会）にはお元気に出師されることを祈ります。

▼小西無鬼氏（兵庫県）から―デカンショ祭りを拙宅の前で大久保玲氏を迎えてのノド自慢や総踊りをやったり、その他県川柳協会の選句などで大多忙ですと。

▼両川洋々氏（鳥取市）は九月から全国鉄川柳人連盟の会長に就任。今後の連動に対しての用件は〒689―11鳥取市東大路六四へ―なお本社関係の事務局に福田英子、保西岳詩、北山越山、吉原紅月諸氏就任。

▼工藤甲吉氏（青森市）は八月から農業指導の月刊誌「青森農業」の川柳の選をされることになった。

▼本多柳志氏（大阪市）は府福祉センター募集の文芸作品川柳の部の一位に入選九月八日黒田知事から表彰された―老骨に鞭打つ汗のさわやかさ―柳志。

▼弘津柳慶氏（柳井市）は柳井市青年商工会主催のいろはカルタの募集に入選、九月三日体育館で賞状と賞品を受けられた由。

▼溝口はやを氏（滋賀県）は日本肖像芸術協会主催の肖像画に堂々入選、大阪梅田阪神デパート八階画廊に於て九月十四日から十九日まで作品が展覧された。

▼八木摩天郎氏（堺市）と河内天笑氏は路郎忌に島根から出席された藤井明朗、小林孤呂二、柳楽鶴丸、大森孝華、栂みどり諸氏を翌八日、NHKドラマの「黄金の日日」の舞台となった堺市の南宗寺ほかへ案内された。（カットはその記念撮影）

▼大矢十郎氏（新宮市）は相変らず誌友獲得に熱意を示めされている。ありがとうございます。

▼行天千代さん（貝塚市）から編集部へ金一封いただきました。

▼本庄金三氏（大阪市）から―病気療養のため郷里の福井県へ帰りますと。ご全快の日をお待ちします。

▽旅信△

▼白岩文衛氏（岡山県）がインドネシアから―軍服で来たさんばしをバディクで―文衛。

▼竹原川柳会から寄せ書拝受。

▼板尾岳人氏（富田林市）から―こちら山頂で寒いですわ―白山8月16日

▽10月の句会△

▼南大阪川柳会は二十日午後六時から松崎町三丁目大萬で開催。題は―偽り・主張・バランス・小銭。

▼南海電鉄川柳会は十九日午後六時から南海本社食堂内で開催。題は―空港・うやむや・資料。

新同人紹介

坪田冬花（つぼた とうか）

―十郎・大輪・推薦―

北野久子（きたの ひさこ）

―文秋・智子・君子・一三夫・推薦

新岡回天子編

川柳句集「まつうら」第二号

さきに発行した「まつうら」は校正の点で不備があり、訂正再発行したのが本書である。定価・八百円。発行所佐賀県唐津市東町二―五三（振替大阪・一九三七六）　新岡回天子方　虹川柳倶楽部

本社九月句会

会場　金属会館

七日　午後六時

骰骨のどこに小町の花の道　　剣花坊

会場正面左端に栞氏所蔵の軸が掲げられてある。川柳忌にちなんでの氏のお心づかいである。

連日の猛暑はついに七十を割った今月のご出席である。病欠・過労が原因である。

栞氏の柳話は形水氏の「谷町」あれこれである。

まず古稀祝賀・谷町刊行記念句会は一〇五名出席、九六名が懇親宴参加という盛会さは形水氏のお人柄によるものと、あの日を思い浮かべるように話を進めて行かれる。

句集「谷町」から佳句を抜すいし、一句一句に形水氏の人情味を温く説かれると、会場も先刻ご承知、うんうんとうなずくほほえましい寸景も見られた。（句集「谷町」の売り切れは近いと思います。—編集部）

今月の月間賞杯は、課題吟ならこの人と今売り出しの大路美幸氏にかがやいた。本年の永久保持者は激戦になるか。

（受付＝児島与呂志・塩満敏・玉置重人）

（進行・西田柳宏子—記録・高杉鬼遊）

出席—与呂志・重人・敏・古方・庸佑・蘭・雅風・夕花・川狂子・右近・喜風・維久子・みずほ・与史・武雄・幸太郎・勝晴・湖風・君子・宇宙太・洋敏・美幸・吸江・寿美子・恒明・幸生・潮花・勝美・滋雀・花梢・美和子・寿馬・千万子・綾女・一三夫・萬的・瓢太・あいき・太茂津・としよ・英子・誓二・三十四・形水・柳宏子・度・文秋・百酒・薫風・〆女・定男・酔々・一二三・寿子・岳人・凡九郎・鬼遊・頂留子・小松園・栞・雀踊子・涼一・鎮彦・葉子。

席題「えくぼ」　　河野　君子選

受付のえくぼに労をねぎらわれ　湖風
低い鼻えくぼがカバーしてくれる　英子
可愛い子のえくぼ突いて見たくなる　文秋
意識してカメラへ向ける片えくぼ　一三夫
男にはいらぬえくぼで生れて来　潮花
百万ドルのえくぼその後も値上げせず　文秋
再会のえくぼはすでに他人のもの　夕花
哀しみは知らずピエロの描きえくぼ　百酒
新妻のえくぼに偽りなど言えぬ　花梢
古希の母明治のえくぼはしわになり　敏
母に似たえくぼで同じ道辿る　寿馬
悪役に悪のきかない片えくぼ　潮花
泣き濡れるえくぼ哀しい喪の女　美幸
あのえくぼで何人男殺したか　瓢太
モンタージュ笑いかけてる娘にえくぼ　川狂子
老妻の鏡に消えた片えくぼ　維久子
えくぼにも哀しみがある母の過去　美幸
紅をひくえくぼに哀しい詩がある　雅風
えくぼやてあれはアバタやなかったか　寿美子
アルバムのえくぼが無言で責めてくる　英子
失恋の瞼に閉じておくえくぼ　滋雀
哀愁を秘めてえくぼの京舞妓　吸江
ウエイトレスえくぼで客を吸いよせる　あいき
一回で入社を決めて来たえくぼ　与史
ゆり籠に百万ドルのえくぼ揺れ　維久子
片えくぼ女の嘘が見抜けない　恒明
えくぼもう見飽いてしもた倦怠期　武雄
おかみさんのえくぼへくぐる縄のれん　武雄
可愛らしいえくぼに財布弱くいる　幸生
悩み等溜めて居そうも無いえくぼ　右近
折角のえくぼだ愛想よくしよう　重人
片えくぼ裏切ることも知っている　夕花
あのえくぼあるいは悪魔かも知れぬ　萬的
傷心の日の自画像からえくぼ消す　夕花
どん底の妻はえくぼを絶やさない　美幸
片えくぼに男が落ちたこともある　君子

席題「喫茶店」　　玉置　重人選

傷心の疲れをいやす喫茶店　寿子
喫茶店示談話が長びいて　涼一
商談の詰めを喫茶店で話し合う　文秋
喫ちゃ店と言って漫才笑わせる　一三夫
喫茶店のレモンティからあるヒント　定男
喫茶店でのなれそめ母の気に召さず　洋敏
喫茶店悪い奴らが二三人　勝晴
喫茶店デートは隅に席をとり　文秋
久濶の出会い免に角喫茶店　百酒
喫茶店カレーライスを食べにゆく　岳人

張りこみのデカも喫茶店の隅の席　武雄
うどん屋が一服に来たティルーム　萬的
見合い組居るデパートの喫茶店　形水
待ち呆けコーヒーだんだん苦くなる　滋雀
喫茶店出ると他人の西東　涼一
マスターの機嫌コーヒーの味変る　敏
喫茶店ここで成る恋成らぬ恋　勝晴
長髪が生だの死だのと喫茶店　夕花
喫茶店でたむろしていた青春記　千万子
落ちついた喫茶店を選ぶプロポーズ　岳人
喫茶店山の男が来て静か　恵美子
爆弾の相談もした喫茶店　萬的
ライバルが筋向いにいたティールーム　栞
マスターは絵心のある純茶房　花梢
喫茶店の隅で少さい儲け口　定男
喫茶店を出るときびしいポーズとる　寿馬
大根と休む市場の喫茶店　鬼遊
保険屋のおばはんと来た喫茶店　栞
喫茶店の女は集金人かも知れぬ　瓢太
モーニングサービスで紳士の仮面ととのえる滋雀　寿馬
モーニングコーヒーで歯車が廻り　重人

兼題「継ぐ」　児島与呂志選

家を継ぐ気の無い子等の里帰り　夢酔
継ぐ者がなければ店を閉じるだけ　三和
遺産継ぐ人なみ延びも減りもせず　希久志
しぶしぶで継いだ家業に惚れてくる　としよ
作業服蛙は蛙後を継ぐ　鬼遊
食うことぐらい出来る父の職を継ぐ　恒明
家を継ぐことを忘れた恋もあり　吸江
伝説に語り継がれた嘘がある　雀踊子
大学が家業を継がぬ子に育て　弘生
のれん継ぐあまりに若き女主人　夕花
継穂ない話火鉢が欲しくなり　雅風
後を継ぐ人なく無形文化財　文秋
二代目を継ぐ産声をしかときく　栞
継ぎ布が宝物のよう亡母の函　幸生
廻り道したが結局家業継ぐ　文秋
継ぐ者もなく消えてゆく大道芸　形水
ピエロの子まじめに芸を引きつぐ気　鎮彦
継ぐ子ない夫婦せっせと金を貯め　としよ
王様の椅子を継ぐ子はよく眠り　美幸
受け継いだ老舗の重みに耐えて生き　瓢太
語り継ぐ民話は文字になどしない　寿馬
語り継ぐ民話へ栗が焼けてくる　滋雀
子につがす地図に近道などはない　花梢
因縁が代々母系が継ぐ老舗　右近
きっちりと家訓を継いでいる老舗　文秋
雪こんこん語り継がれて来た民話　雀踊子
先代の金だけ継いで胃が弱り　一三夫
先祖の土地守る長男として生れ　雀踊子
見込まれて継いだのれんの重いこと　与呂志

兼題「軒」　岩本雀踊子選

忘れもの軒に吊して小商　優
心から人を迎える軒にする　規不風
傾いた軒を支える母の汗　美幸
軒下に張らしてくれと党が来る　涼一
民芸の町朝市に軒を貸し　湖風
風鈴の軒から秋が忍びよる　滋雀
路地裏の奥に居職の木札さげ　蘭
野良犬は軒のぬくみを知っている　美幸

川柳塔誌・兼・席題課題表（一路集）

（創刊号～52年11月号）

血圧・血管・決心・欠点・月賦・仮病・蹴る・喧嘩・見学・現役・現代っ子・原稿・原爆追憶・限界・玄関。

「コ」

コーヒー・コーラス・コイン・子・鯉・鯉のぼり・恋・好意・好奇心・好調・高官・高原・高姿勢・交差点・交際・公害・公園・香水・孝行・光線・広告・幸運・紅白・降参・口実・氷・強情・声がわり・古稀・コケシ・孤高・志・古書・誤植・故障・ゴシップ・小銭・国旗・小口・誇大・子連れ・子ども・小走り・古木・古米・米・暦・ゴルフ・コンクール・コンビ・婚礼・混線・ゴーゴー。

「サ」

サイレン・最高・細工・再会・賽銭・財布・坂・逆か立ち・先取り・酒ぐせ・さしがね・五月晴れ・札束・雑役・雑念・雑音・里親・沙漠・寒がり・サラ金・皿・猿・サンマ・サンプル・三角・賛成・残飯。

「シ」

シーツ・シームレス・Gパン・指圧・栞・司会・四月バカ・叱る・時間・資金・しごき・視察・試食・自信・自尊心・下請け・下取り・舌・失言・失神・失敗・実力・実家・実印・私鉄・自転車・しとやか・（この項未完）

―樫谷寿馬

昭和53年度大阪文化祭
第30回 川柳大会
10月22日（日）10時開場

大和路を語れば軒の吊し柿　湖風
傾いた軒から先祖が喋り出す　滋雀
城下町軒の低いを見て廻り　吸江
軒先に杉玉揺れている地酒　酔々
軒先きに女系家族の笑み溜まる　夕花
重文の軒に歴史が吹き溜る　寿馬
軒端にも家風が生きている旧家　寿馬
軒低くならぶ宿場に夢を追い　百酒
軒先に溜まる秋刀魚を焼くけむり　酔々
軒下の風の悲鳴をふさぐ耳　定男
付き合いと言う軒並の寄付をする　文秋
軒先の籠で死んでるキリギリス　潮花
片手間に軒先に出す小商い　蘭
軒を出る男の背は祈られる　美幸
軒下へ迷よた風の吹き溜り　定男
盛り場の軒を借る易者の灯　〆女
軒先の犬も暑さをもて余し　洋敏
軒下の夫婦に貸さぬ蛇の目傘　岳人
軒深い藁ふき屋根にある歴史　としよ
軒下でゆっくり乾わく母の足袋　岳人
堂守の軒に漢薬ぶら下り　雀踊子

兼題「着眼」　戸田　古方選

庵の眼に狂いはなかったやる男　軒太楼
参謀に着眼のよい妻を据え　規不風
管内の地図に着眼点を入れ　三和
着眼点頭を撫てほめてやり　登美也
着眼の帆が犬橇にひるがえり　優
着眼はほめて結局乗り遅れ　柳信
眼を着けたが実行は人がした　重人
着眼の悪さ逆立ちしてわかり　度
羅漢さんの御着眼私を見てはる　栞
着眼の甘さを弥次郎兵衛に笑われる　柳宏子
一枚の手形のうらに眼を着ける　酔々
着眼の非凡母はブレーキかけてくる　維久子
未知数という着眼にある魅力　千万子
孫の着眼驚くふりで聞いてやり　静馬
着眼を変えると明日が見えてくる　美幸
想像もつかぬ子供の着眼点　幸太郎
着眼点やっぱり君やと思もとった　凡九郎
着眼が狂うといびつになる世間　雀踊子
着眼はやがて日本を大きくし　三十四
迷路から抜ける着眼だってある　宇宙太
着眼点ライバルの動く影　雀踊子
着眼がええと親馬鹿子の絵見る　静馬
着眼の現実放水を笑えない　君子
着眼点見えざる敵の中に置く　凡九郎
人様ざまどこにも着眼点はある　潮花
どこに眼を着けたか馬鹿な娘をもらい　右近
着眼点一致さわやか握手する　湖風
悪知恵の着眼をあなどれず　重人
美術館殿られたような構図見る　吸江
着眼は冴え活気ある店じまい　恵美子
着眼の卵へ耳を当てている　太茂津
眼を着けたとこから雑音聞こえない　恒明
欲捨ててからの着眼さえて来る　古方
人間の着眼そこらがええとこで　

兼題「柄」　大坂　形水選

人柄を讃え集る一周忌　登美也
売名の果ては身柄までも売り　軒太楼
花柄をみんな集めて嫁き遅れ　宇宙太
家柄を言えば抵抗する若さ　右近
御手洗の柄杓が水を神にする　寿馬
同じ柄着ても見劣りする私　花梢
出世街道妻も人柄育てられ　花梢
人柄が遊び釦にある気品　一三夫
燃えそうな柄で場末をのし歩き　宇宙太
ちと地味な柄へ桔梗のきれい庭　萬的
一生を着る生地でない派手な柄　弘生
幸せになりたい鶴の柄を選る　美和子

金一封

村田　瓢太殿

本社の発展基金として拝受いたしました

九月四日

川柳塔社

お人柄断乎火中の栗拾う　酔々
大柄で女図太い勝負する　小松園
柄の良い方へは注がぬ釜ケ崎　宇宙太
意地捨てて会いにゆく夜の柄を撰り　小松園
ヅカガールとおんなじ柄を得意がり　静馬
波寄せて干いて人生の柄創る　維久子
縫いあげた娘の柄に手を通し　潮花
中年の焦りか派手な柄を択り　吸江
大胆な柄を着こなす帰省の娘　夕花
L寸に私ごのみの柄がない　夕花
売り上手何時しか好きな柄になり　一二三
花の柄きれいに咲かす展示会　一三夫
同じ柄女心にある嫉妬　〆女
停戦の姑と嫁で柄を撰る　英子
焼香が長々つづくお人柄　鬼遊
初孫の柄は姑の眼で選び　萬的
玄関へ家柄示す枝を張り　与史
ネクタイの柄まで女房殿でっか　古方
喜びの日が花柄の服を着る　度
こけしにもあったこけしの好きな柄　栞
大柄な女で花柄よく似合う　柳宏子
大胆な柄の愚妻へふと疑惑　恵美子
人柄がにじむ切手の貼った位置　一三夫
ステテコが似合う土地柄コップ酒　鬼遊
ネクタイが派手外泊が多くなる　恒明
豪快に観世を唸るお人柄　酔々
人柄がさせる隅に座っていても君　凡九郎
ああそうと一言だけのお人柄　鬼遊
傷心の夫へ明るい柄を着る　美幸
得々と柄落ちパリーで買うてくる　形水

（河井庸佑整理）

同人総会

式次第

司会　西田柳宏子

開会の辞　川村　好郎

挨拶　中島生々庵

議事

会計報告　若本多久志

事業経過報告　西尾　栞

質疑応答

開会の辞　菊沢小松園

川柳塔社53年度
二賞発表句会と同人総会

日時　10月8日（日）　午後1時開場　午後2時から同人総会　午後5時半から二賞発表

会場　大阪府中小企業文化会館（五階五二号）
天王寺区上汐町五丁目二五番地・地下鉄谷町九丁目下車南三百米（電話七七一・四〇九六番）

柳話　中島生々庵

☆**路郎賞・川柳塔賞表彰**

兼題　「根」　野村太茂津選
「宿敵」　橘高薫風選
「笑顔」　黒川紫香選
「主役」　西尾栞選
（二題・題と選者は当日発表・各題三句）

席題

会費　五百円

懇親宴　会費二千円・4時から5時まで・どなたもお気軽にご参加ください。お申込みは10月3日までに岳人宛。

主催　川柳塔社

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

東大阪川柳同好会　三十四報

下積みの鎧は要らぬ肌ざはり　凡九郎
定年まで下積みでいた生字引　誓二
人間国宝下積み時代をなつかしむ　綾女
下積みの頃から見込んだ夫です　あいき
下積みの苦労が光るスターの座　柳宏子
ねって待つ心下積み持ちつづけ　文秋
長期ローン夫の明日を信じてみ　かずを
新婚の夢をローンで組み立てる　孤舟
百年の下積み土台に持つ誇り　喜風
又聞きと言いたいだけをゆうていた　弥山人
又聞きの時は枝葉がつきはじめ　鶴声
又聞きがほんとうらしう身振りする　三十四
傘さえも荷となるドヤで雨を駈け　雅風
又聞きのその又聞きで揉めてくる　湖風
又聞きに信を置かせぬ我の過去　久之
又聞きのペースで盆栽枯れてくる　度
此の飴に孫の千歳を念じつつ　良京
又聞きで味と色とが付けてある　翠公
新作と云われ見直す蕾の色　くに子
又聞きにゆがめられていた本音　鎮彦

川柳化粧櫓　植村客遊子報

吐き捨てた言葉に未練残してる　岳詩
ナツメロに一人酔ってるバーの隅　実男
安全を口ぐせにして管理職　紅月
セーラ服かばんの中へ鏡入れ　永楽
父偲ぶ娘の歯の白さ気にかかり　客遊子
七夕を祭る内孫欲しいとも　秋月
口ひげを生やして医者に素直なり　葉香
スモッグの街に満月気につかず　奮水
片隅でくすぶる恋を消さず老い　越山
顔のしわいつも気にしている上司　寿風

京都塔の会　松川杜的報

梅雨晴れのくちなしはっとする白さ　美穂
嫌われているなと思う受け答え　明代
バカだった過去しみじみとひとり酒　王石
我慢しているのに馬鹿と勘ぐられ　白溪子
馬鹿と言う夫の機嫌嬉しくて　紫香
天才と馬鹿がようにたことを言う　潮花
喜寿こえてある日は馬鹿で押し通し　和友
彦星にあやかり出した子の便り　弘三
子が星座教えてくれた涼み台　飛鳥
星座など知らんが星が好きでみる　客遊子
子の仰ぐ星座は一杯夢があり　芳子
箸紙に「おかげさま」とあり禅料理　杜的
ベランダの桔梗小さな秋が咲く　万的
萩すこし動いて人待つ風になる　水客
涼風は入口だけの百貨店　求芽
六根清浄汗の行衣に風涼し　誠史

川柳塔まつえ　恒松町紅報

感違い隣りあれから物言わず　芳子
あれからは鏡に嘘も消えた仲　虎秋
番付に俺の意欲が背伸びする　みのる
スポーツ欄新番付に輝く目　千草
義手語るあれから再起の道厳し　正朗
胸元も裸女のサングラス　叮紅
真っ裸不況になれた肌の艶　孤呂二
評判は悪いが奥さんは美人　鶴丸
番付にけいこ不足を笑われる　登美也
評判のとおり満足する値段　舞吉

倉吉打吹川柳会　奥谷弘朗報

へそくりを単笥に寝かせ鍵をかけ　舎人
見通しの甘さ逆目と出たあせり　軒太楼
子の電話あってもなくても気にかかり　俊子
言葉残さず伜任せに逝った夫　千重子
愚痴云わぬ事が信条老の意地　紫泉
行楽の好きな姑で足達者　弘朗
モデル嬢椅子にかけるもしなつくり　車楽
社長よりひげの専務が偉く見え　御前
人のよさ割引されてにくまれず　碧水
音たてる炎の奥に悔いを捨て　民子
表面が美し過ぎて案じられ　香雲
晴れ姿ジャの目の下の京人形　陳者
音たてて夢が崩れる亡妻が去る　嘉子
理想の灯上げれば揺らぐ風あたり　知恵
お目出たい帯を一人で結ばれず　早苗
ケリがつく一言を持つ実力者　自然
マネキンのスタイルだから似合う服　雄々
逆境に男男の顔を見せ　弘朗
馬鹿になる男で無事な今日があり　車楽
反対の自由を頭からおさえ　おさむ
反対もよう言わずする空返事　宗則

川柳後楽（岡山市）　井上柳五郎報

照路
柳五郎

反対へ一言居士が手をあげる　昌吾
立話反対論が輪を拡げ　定平
気まぐれの妻の反対仲がよい　簾正道
理性とは反対になる赤提灯　草風
棲む家がなくとも夕やけ彩がある　佐加恵
家並みにローンの匂いがする団地　梁太
チラホラと斜めに貼った貸家札　元一
新妻に旧家の重みのしかかり　たけ志
家紋などどちらでもよい貸衣裳　久米雄
話せない男こちらももの言わず　恒洋
闘志を燃やす沈黙の眼が憎い　秋月
沈黙が暴露する日へ指を祈り　ひろし
家裁にて沈黙続く恋女房　幽谷
冷蔵庫また停電へ腹を立て　博友
冷蔵庫坐薬も隅で出番待つ　哲郎
安心をしていた冷蔵庫で腐り　宏大
ランドセル降す間もなし冷蔵庫　川竹

川柳高知　松風報

友達のように夫婦で若く居る　菊野
友人がみんな嫁いでゆく焦り　久江
親友の危機が救える判をつく　幸恵
親友に絵葉書を書く一人旅　恭一
むき出しの夏へハイミス赤を着る　秋翠
裏切った妻をテレビへ出て探し　とみ子
裏切りも交じり乾杯高くあげ　白水
夕食の献立てかえる電話来る　マコ
テキストにない母さんの味が好き　窓花
新聞を広げたままの物憂い日　芽十
針千本呑まねばならぬ崖に立ち　海州
窓に臥て雲の流れといる微熱　紅雨
嘘ひとつ隠して妻の酌を受け　松風
手を少しのばせば届く夢を見た　桂緑
もう一つの顔を日曜呼び出され　一二三
恋文を抱けばあの人の鼓動　美和子
先頭を行く先生で列が切れ　節子
肩書は問わず平和な日を暮し　麗子
他人には老人手帖は見せられず　紀久

城北川柳会　川口弘生報

きっかけが或る日私を変えさせる　道子
笹舟を流しきっかけ摑めるか　酔々
きっかけを問えば俄に頬を染め　右近
吠えついた犬が二人を結びつけ　弘生
きっかけをつかんでからの事にする　恒治
握手するきっかけ探す冷戦中　満津子
きっかけがなくてタバコやたら喫い　千子
きっかけは長寿の秘訣聞いた時　炉斎
川柳がきっかけとなり友ふえる　人美
さりげなくきっかけ作りて妻ねだる　喜洸
きっかけが摑めず盃重ねてる　ふみ
鈴を振る道は四国の山を越え　テルミ
頼もしさ敵も味方も道をあけ　ますえ
想い出の道は還らぬ夢を追い　百酒
道聞けば優しく少女ついて来る　ハルエ
長生きはいつも陽気で生き生きと　きくみ
米寿まで生きて祝の市長盃　一休
長生きへ孫の恋人から会釈　三十四

うみなり川柳会（鳥取市）　大塚豊生報

波風を立てぬ決意の皿洗う　盛桜
朝顔がすねて隣りの窓覗く　吟月
古墳出て因幡の国が活気づき　正人
輪の外に強い個性がしのぐ汗　雄人
世話好きがすぎても勇み足となり　喬水
狭くともやはり吾が家にまさるなし　天人
這うようにして古墳から絵をさぐり　とし江
断ち切れぬ思いへ波の音を聞く　富美湖
住み馴れて暑さをしのぐ場所を知り　純平
早起きの子に朝顔が笑ってる　華子
腹度胸死線しのいでから生まれ　笑王
河豚の肝やっぱりこはあきらめる　舟宏
しのんでた涙はこぶしてぬぐう　熊生
好き嫌いある子がのがれた食あたり　無人
朝顔が屋根で咲いてる新学期　葉士人
玉砕の島に変らぬ波の音　豊生
石なげて波紋見つめている孤独　弘朗
古墳発掘殉死者なにか叫びそう　洋々
父の酒しのぐ吾が子の呑みっぷり　貞山
新記録プールの波がまださわぎ　由多香

どんぐり川柳会　谷垣史好報

八月の誓いは石に彫って置く　鬼遊

佳句地10選（前月号から）

中川滋雀選

埋立地底にも波はひそんでる　千代
報恩の涙は弟子がこぼさせる　越山
ミルク飲むこの子無限の刻があり　笑子
人生を豌き通して酒がある　水客
精一ぱいの抵抗行先答えない　千子
そっくりの柄を見てから着なくなり　度生
スーパーの暗示は二円まけてある　熊邦晴
十八のため息食べるものは食べ　光夫
二十坪我が土地にして夢終る　鬼遊
ペチャンコにする一と言が妻にあり　

絵馬たのし雑居して待つ誓いごと　憲祐
大声で誓うと少し疑われ　美幸
言いなりに汽車は鉄橋渡るなり　岳人
いいなりになればなったで不足言う　瓢太
誓いまだ故郷の山が夢に出る　一二三
あじさいに誓いを迫ると負けになる　弥生
試歩の身に蝿の素早さうらやまし　真砂
新入社職場の鬼を誓わされ　喜風
にげよ蝿にげねばこの手が打ちにくい　サヨ
式順として誓詞読む二人　好郎
六感がひらめく男の瞳がきれい　勝美
言いなりになったを悔いる帰り道　吸江
紅白の熨斗より映えている誓い　薫風
永遠を誓った妻にしても老け　克美
言いなりを拳で耐えている社員　雅風
いらいらへ来たのが蝿の落度なり　誠二

オーエスケー川柳会　大坂　形水報

桟橋で雨に濡れたは紙テープ　光男
かすがいの筈の子供で夫婦もめ　栄
割勘へゆっくりできぬ箸を持ち　みどり
てるてる坊主もひっくり返る雨男　亜成
自信ないとこへくさびが打ち込まれ　有一
ぼんやりと雨眺めてる昼下り　亜也子
ウェストが気になりだして歩いてる　健坊
長続き出来る歩巾のマイペース　一扇
停年の日から歩かぬ路となる　一念
ゆっくりと飲んで本音言うつもり　千夢
ゆっくりとうれしい時の酒をくむ　博泉
雨の中原色の似合う女が来る　野生
絹糸の雨コーヒーが欲しくなり　聖地
日の丸のはためく方へ歩き出す　形水

着せかけて女の髪の匂う雨　入仙
宿の傘さして男は出たまんま　好郎

川柳たけはら　森井　菁居報

美しく枯れて三つ児になんなさり　静水
この土地の土になる気の暖簾なり　房子
てっぺんの椅子にやすらぎなどはない　蘭幸
生きている証しの罪をまた重ね　文晴
あすの陽へ無量の橋が燃えている　紫光
ところどころに誤植が欲しい聖書かな　不朽
春を行く双生児をのせて春をゆく　笑子
死力尽して空しさだけ残り　鈍舟
口下手のきっかけつくる友のいて　敬子
お喋りの男が黙る曲り角　菁居
弟は悪いやっぱり男の子　小六愛
土曜日のそろばん父さんつれてって　小三紀
ほんとうの気持ち鏡に告げてみる　千代美
さようなら明日のペンが錆びてゆく　鬼焼
火薬は詰めたが引き金よう引かず　寛子
独り居へのびほうだいの庭となり　松緑
恐い顔して一枚の紙が待ち　一路
一直線ふり向けば転びそう　節夫
沈みたい日も軽石の自己嫌悪　英詩
疑いは晴れても噂まだ消せず　かつ子
負けん気の色で自画像ぬりつぶす　酉合

川柳ささやま　河原みのる報

黒潮の怒濤に父が生きている　可住
海の唄音符が狂う程汚れ　越山
沖縄は海の青さを金にする　宗珠
山里の児の海の絵が入選し　テル
海鳴りの止まず悲しさ呑んだ朝　素水
スカートの昼寝ちょっぴり向きを変え　無聖

利子で喰うご隠居様は昼寝せず　文平
ドアに鍵アパート昼寝ほしいまま　百合子
宮仕えさげすみ昼寝の夫貧し　孝
寝る木影極楽風がそよそよと　近江
スポーツに心の友を育くまれ　よしの
スポーツより将棋が好きなオトコノコ　みのる
球入れへ明治の腰がしゃんと伸び　しげを
冷や水と云われながらも老い駆ける　木綿也
披露宴スポーツ万能云い並べ　絹子

川柳わかやま　津田　与史報

真中に鼻置いて見た神の意志　凡九郎
網の目を逃げる大物かも知れぬ　雀踊子
寂し気な顔に別れが言い出せず　誠一
終点のない道に建つ開拓碑　幸
鼻の高さ気にして鏡拭いて見る　寿美数
鼻ちびて地蔵柔和の相を増す　弘生
鼻息の割にあっさり折れて来る　緑楼
鼻だけで主役とわかる頬かむり　十郎
鼻薬がかした自信あわてない　勇太
愚かにも殻を破れず閉じこもり　佐知子
真実を生きる愚直の名に甘え　きみ
返って来ぬ筈愚問に過ぎたらし　保夫
尾灯点となって未練がもり上り　裕美
点となりいつも心に生きる母　としよ
要点がまたずれて来た話し好き　〆女
満ちたりた思慕をさざ波知っている　寿子
母と子の原点試験官じゃない　紀久子

菜の花句会　高杉　鬼遊報

取引きに泣きの一手もある女　万里
耳打ちの秘密は耳からこぼれ落ち　みずほ
泣きごとは云うまい他人がひとりいる　弥生

人間が人間を狩る楯を持ち　鬼遊
どろ舟に乗った狸が笑えるか　酔々
傾けた傘に女の愛を秘め　夕花
女忍者今日は香水つけぬこと　栞
渚から海を見ている桜貝　美狭子
泣いた日を忘れていない竹人形　美幸
情熱を秘めているから白く咲き　糸葉
のぞき見の好きな忍者でよく落ちる　幸生
きのこ狩やたら女の笑う声　紀美代
母になる忍者はやがて地に降りる　岳人
寝転んで秘境覗けるテレビッ子　秋美
首狩りの行事は都会にだってある　雀踊子
父に似て女泣かせの顔となる　昭子
ゆきずりの恋と渚は知っている　涼一
人生の嬉しさばかり秘めておこ　豊子
涙腺の弱い男は上を向く　勝美
内緒ごと風の音にも気をつかい　小松園

堺川柳会　藤井一二三報

商魂は地下街までも名所にし　蘭
若い日の無駄でなかった廻り道　ミツエ
黄金を咬えた狐友を呼ぶ　東雲
灯台守にらむ怒濤もメロドラマ　与一
その頃の貿易手真似で用が足り　邦晴
不器用をすねて廻らぬねじ廻し　清女
持つ人が持てば黄金生きてくる　宏子
貿易の歴史ドラマで見直され　みどり
貿易へ豊かに暮れて港の灯　孝華

岸和田市民川柳大会

10月22日0時半から（前号参照）

僕の灯台は女房です　鶴丸
貿易の黒字つまはじきの日本　孤呂二
古墳世に出て名所へ金をかけ　明朗
貿易の荷に花の種しがみつき　天笑
悔い一つ捨てに海まで廻り道　笑痴
人間嫌いの風を灯台受けとめる　水客
ロケーションの序名所も見て歩き　摩天郎
脱落をしてから独楽も廻らない　紫香
日々好日世間の噂は気にしてず　小松園

川柳大阪　児島与呂志報

働き蟻のろまな一匹俺に似る　真佐志
献立の空返事する昼下り　胡蝶
厄年に静かに散った黒い花　君枝
前進の構えで靴をそろえられ　比呂志
酔うているうちは痛まぬ胸の傷　誓二
蝿二匹昼寝の顔でもつれてる　本蔭棒
村祭り幼なじみの手が温い　佳加志
美しい人にはトゲのあるカゲリ　秀峰
番人の役でプールへ従いていき　笑風
奈良漬にすぐ酔う下戸の奈良めぐり　酔々
底辺に住めば気さくな友が出来　希久志
酔うことを知らない酒できらわれる　眉水
反省をしあってまるい夫婦坂　重人
命綱海女と夫の息が合う　三十四
夜の鼓動消して終電走り去る　洛酔
天職へ男きっちり靴を履く　敏
反省の日々を聖書の鉄格子　雅巣
公共の二字が走らす赤字線　漁人
反省の一言居士に部屋がない　与呂志

川柳しんぐう　川上大輪報

炎天に汗拭く嘘のない暮し　十郎
炎天下勝利へ挑む汗が飛び　勇
サラ金の誘いへ弱い意志を悔い　富子
サラ金は血の出る様なゼニの音　雀踊子
不況風吸うてサラ金ふくれてる　千寿子
人妻へ恐しい無理サラ金利　豊水
平和すぎるからサラ金よく稼ぎ　大輪
サラ金の笑みは命を利子に換え　守
サラ金を頼って方向見失い　寿子
サラ金が追いかけてくるマイホーム　英子
砂だらけ裸のまんま子が帰り　冬花
本心がこぼれた砂の中にある　幸
日が暮れて渚の砂は波にとけ　明
これ以上言えない砂に書いて見せ　とよ子
集金へゆとり隠した顔が出る　はじむ
砂煙り今日のくらしの意気でたて　としよ
ゆとりある家庭に子供のない皮肉　正治
巣立たせたゆとりのんびりお茶をのむ　澄孝
四人目が嫁ぐゆとりのない暮し　まさ子
コツコツと善人ゆとりなど知らず　溪水

いずも川柳会　高見鐘堂報

山一つ越して雷雨を連れ　はじめ
雷が鳴って長居が腰をあげ　代仕男
旱天へ雷怒鳴っただけで過ぎ　亮悦
うまそうな笑い茶の間の午后三時　虎秋
間食が主食を乱す夏休み　多賀子
お喋りと間食楽し女旅　みのる
夜の海月ゆったりと背に泳ぐ　正江
泳ぎから帰った家は派手に干し　立雲
別れ来てしばし忘れぬ余情抱く　明朗
ライバルの急所当分伏せておく　孝太郎
間食をストップさせた聴心器　幹伸

灯台へ秋積んでくる雲泳ぎ　早苗
当分は居る気か娘子のおしめ　九二老
妻の留守当分嫁に気を使う　夢酔
おもむろに授乳で知ったあこの熱　九歩
集計へ熱気あふれる開票所　可保留
熱戦に画面はみ出すホームラン　河南
子の熱を母の額で確かめる　草丘
スタンドの熱気逆転また逆転　緑之助

南海電鉄川柳会（大阪市）辻　圭水報

交通ルールだけは守れと母の願　摩天郎
赤信号犬さえちゃんとまってる　圭水
ルール犯し交通遺児をなぜつくる　ミツエ
飲酒運転教師の重み忘れはて　宏子
遵法を守って渋滞するルール　勝美
八十キロ飛ばす若さに青くなり　維久子
園児から交通ルール教えられ　柳信
歩行者はそこ行け道の隅ライン　雅風
交通ルール親より子供知っている　正和
酔払い交通ルール知らぬ振り　東雲
免許証ルールに従がい無傷です　与一
笛鳴りて交通ルールも良くまもり　朝子
スピードを出すなと尻目ブッ飛ばし　川狂子
くいちがう夫婦並行線のまま別れ　綾女

虹川柳倶楽部　新岡回天子報

貯めてためて六文銭でサヨウナラ　五木
外人客権現様にうち詣で　実
絵すだれに女主人の透けて見え　勝一
使い捨てライター探すのを止める　紫浪
シースルー中年男の猥らな目　岩光
一人子が親を泣かせる子に育ち　一竿
二番目の嫁ぐ貯蓄が間に合わず　金志郎
起きるまで目を離すまい転んだ子　ひろ坊
核家族貯蓄頼りに細く生き　畑中
酒煙草やめた貯蓄を世のために　嵌
日照り田に恵みの雨も満たぬ侭　朴竜
宝くじ発表と共に消える夢　掬治
鍬型も鈴虫も住む子のお城　虹汀
うたたねの汗もが痛い赤子泣き　回天子

西宮北口句会　千世子報

砂場から小さいもめごともってくる　美代子
もうけてる汗はちっとも苦にならず　笑女
谿鶯まだ耳にある旅帰り　千世子
冷雨降る青い娼婦に逢いにゆく　伊升
汗臭い服へ御苦労様と言い　泉女
年がいもなくパーティーの客になり　摩耶子
暗い庭なにかが立っていそうなり　正祐
野良猫も我が家で眠る蝉しぐれ　喜久甫
女の子嫌いな色が一つあり　〃女
陣痛で汗した子等にそむかれる　とし女
嫌われていると気付いた父の死後　薫風
米の値が汗を知らない手で決まる　婦美子
老後の事ばかり易う年となる　政甫
隣席の美人に扇の風もらう　ろ山
朝の茶が不味い新聞休刊日　静馬
嫌いでも好きでもないと言う返事　八州
ジューンブライドはや七月の陽に焼ける　寿馬
嫌われていてもゴキブリ世を捨てず　のぼる
パン屑を箒で掃いている文化　めぐる

和歌山七面句会　中筋　三幸報

ひやかしの客も嬉しい開店日　ふく代
旅疲れ紀の川渡ればどっと出る　和美
背すだれあめ湯あま酒京の坂　隆恵

名物「堺まつり」協賛

第32回 堺市民川柳の会

「黄金の日々」で脚光を浴びている堺の町に、今年も『堺まつり』の華々しいパレードを見物旁々、秋の一日を川柳でたのしんで下さい。

日時　昭和53年10月15日（日）12時
会場　堺労働セッツルメント（阪堺線大小路下車西30米三井銀行裏）
挨拶　高木幸太郎
柳話　川村好郎
宿題　森中恵美子選
「針」　亀山恭太選
「美談」　谷垣史好選
「砂」　野村太茂津選
「船」　田中南都選
「母校」　阿部柳太選
「商」
席題　なし　各題3句（出句は出席者に限る）
締切　13時　堺まつりパレード見物披講15時
会費　500円（記念品、作品集呈）
呈賞　各題秀句に市長賞他を呈賞
懇親宴　南海グリル本店・5時30分

主催　堺市文化団体連絡協議会
堺川柳作家協会
後援　堺市・堺市教育委員会
協賛　堺まつり振興会

●連絡先　593 堺市堀上緑町二丁九ノ二　河内天笑
TEL〇七二二㊇四七〇六

女ひとり意地と涙で開店し　宣子
焼鳥の開店義理の顔並ぶ　わか
坂の上星が出ている漁師町　光治
衣紋掛つかれた型で今日終る　冨子
パチンコ屋もう何度目の開店目　愛子
子を視野に疲れをほぐす寡婦の意地　寿子
高峯の花あるを信じて坂上る　晶子
ゴルフでも疲れサウナでまた疲れ　智水庵
開店からめっぽうお酒強くなり　知也
五十坂越せば越したで迷いあり　三幸
サーカスは見る人のほう疲れてる　昌三郎
忍従を運命と歩く女坂　周穂
開店の花輪はバーのマダムより　勇次
開店日知り合いだけで席うまる　隆史
開店の声溌剌と花輪映ゆ　秀雄

三井ケ丘川柳会　高田　博泉報

加速度が付いて噂が飛んで行く　晴風
線香花火素朴な父と子の対話　恵美子
遠花火玉子豆腐の口あたり　恒明
戦争のおみやげ民主主義でした　てまり
スピードを金で買ってる特急券　勝美
梅雨空に合せたスピードかたつむり　洋茶
釣り堀の鮒は曜日を知っており　光夫
空間を私の知らぬ亡父が生き　江留美
遠足の声積み終えて電車出る　よしひろ
子の居ない夫婦で買っている花火　野生
早熟のひまわり鯉に照れて咲き　琴音
炎えつきた花火に嘘と知らされる　一念
スピードを落し美容師手を休め　亜也子
風鈴もゆるることなき熱帯夜　三郎
眼帯の奥で確かに見た花火　度

文鳥の欠伸小さく足伸ばす　亜成
青空が池のにごりを清めてる　博泉
飛ぶ灯り一つ一つが旅の色　〆女
スピードを出させる人が横に乗り　小路
サルスベリ沈む心へ灯をともす　あいき
大正デモクラシーというアメリカもおました　古方
スピードにのらずぼちぼち歩くぼく　亜鈍
ワイキキの水に両足つけてみる　小松園
青い眼の人形は核を知らなんだ　鬼遊
尾骶骨から脳天へ昇る花火　薫風

南大阪川柳会　中川　滋雀報

子育ての両手は実益考えず　美幸
粉飾決算実益宙に浮いている　涼一
損しても信用と云う利をつかみ　文秋
花愛でる実益などは考えず　智子
冷静になると常識動き出す　久子
非常識な食事時を狙うて来る　誓二
無茶通る世へ常識が小さくなり　喜風
こんな溝一つに常識踏み切れず　滋雀
流行をうまく着こなす八等身　蘭
能率よう頭でこなす腕の冴え　勝美
こなす程至難の芸には巾がある　万里
ベランダに逃げても不信乾かない　好郎
ベランダが向き合う家で仲がよい　綾女
ベランダの片隅女心をうめてある　凡九郎
ベランダから見える範囲で子が遊ぶ　節子
ふんわりと釈迦の両手の中へ落ち　小松園
ふんわりの雲焦心をとってくれ　雅風
迷惑はポックリ寺へ預ける気　憲祐
迷惑をしらぬ女の太い声　あいき
迷惑な音だけ貰う熱帯夜　度

富田林市文化祭　川柳大会

日　時　五十三年十一月五日（日）
正午開場　出句締切　一時半

会　場　富田林市民会館
（近鉄南大阪線喜志駅下車又は富田林駅下車近鉄バスにて志紀車庫行きに乗車旭ケ丘下車すぐ）

兼題及び選者　各題　三句吐

「下町」　高橋　幸代選
「洗う」　宮西　弥生選
「造花」　高橋千万子選
「紙」　竹中　綾女選
「伝説」　垂井千寿子選
「途中」　小出　智子選
「帯」　岩田　美代選

席　題　当日一題発表

会　費　五百円

懇親宴　千五百円

主　催　富田林市・富田林教育委員会

後　援　富柳会

本社十一月句会

日時　十一月七日（火）午後六時
会場　金属会館
南区鰻谷東之町10番地
地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ
電話　271・3935番
柳話　戸田古方
（今月の出題・香川酔々）
兼題「不敵」香川酔々選
「力仕事」西田柳宏子選
「釣り合い」若柳潮花選
「樽」正本水客選
席題二題　当日発表
会費　三百円　各題三句以内厳守
★投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20
川柳塔社

12月の兼題　「技巧」「停電」　「雑唱」「物心」

11月は2日が常任理事会

・募集・

十一月号発表（9月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）正本水客選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「晦日そば」高橋夕花選
「集金」野田素身郎選
「冬」山内静水選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

十二月号発表（10月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）正本水客選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「羊毛」内芝としよ選
「開運」宮川珠笑選
「紙」水粉千翁選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

常任理事会は10月4日　5時から

定価　四百円（送料29円）
半年分　二千五百円（送料共）
一年分　四千八百円（送料共）
昭和五十三年九月二十五日印刷
昭和五十三年十月一日発行
編集兼発行人　中島蓬太郎
印刷所　藤原童心社
郵便番号　542
大阪市南区鰻谷中之町二〇番通
発行所　川柳塔社
大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
電話　大阪・二七一―三九八五番
振替口座　大阪・三三三六八番

お買物は
4都を結ぶ
大丸へ！
大阪・東京
大丸
京都・神戸

・ペンペン草・

53年度二賞きまる

★第13回路郎賞は香川酔々さんが獲得。第12回川柳塔賞は竹原の古谷節夫さんにかがやいた。

好評句集「谷町」

★限定五百冊が残りすくなくなった。形水氏のお人柄そのまま、各誌の書評も好調である。刊行記念句会の懇親宴も薫風さんの爽やかな司会が好評だった。ともすると〝宴会〟がドロドロに酔ばらってしまう場合もある。これは悪趣味だ。

宴会嫌悪症

★飲めないので、ぼくは食べるものを食べてしまうと姿を消すことにしている。会費の中にアルコール代もはいっているので、このカタキをジュースでとり戻してやろう、なんてイジマシイ考えを起こすと引っ込みがつかなくなり、周囲からクダを巻かれる羽目になるのがオチだ。

★イヤだと拝んでいるのに「さえ敬え」とか「さあ一席喋れ」とムリヤリに引っぱり出す司会は、人権蹂躙だ。故岸本水府先生が十何年前にある新聞へ書いておられたが、やはりこのような司会者には困る—とあった。故秋田実先生もこのようなドンジャン騒ぎの宴会はお嫌いだった。ぼくもそうだが、宴会ぎらいというのはテレ屋なのだろうか。

句集「千亀利」進行中

★高橋操子さんの句集「千亀利」は生々庵主幹の序文もいただき、只今進行中だが、来月23日が刊行記念句会である。句集は「谷町」と同じサイズでページ数もほぼ同じ。

★拙著「川柳寄席」を出す時、AプランとBプランを考えた。Aプランにはカラー写真と、随所に二度刷りという、ちょっと凝ったものだったが、予算の関係で断念せざるを得なかった。高橋操子さんから「好きなようにしてほしい」と、全面的に一任されたのをさいわいに、自分の果たせなかった夢を「千亀利」によって正夢にするよろこびにもえている。本文の用紙も呉服にちなんで〝絹目〟を使うことにした。活字は楷書である。操子さんの好みの紫色をイメージカラーにした。僕の本名の一字「藤」や題字ほか各章のタイトル文字は同人久米奈良子さんにおねがいした。〔書号が紫舟〕これで紫の色が三つそろったわけだが、何かいいことがありそうな。

★この年令になってカラー写真など—とシリ込まれるのを強引にお願いした。普通はカラー写真は三度刷りか四度刷りだが、原色そのままにしたいため、五、六度刷りになるかも知れない。フィルムから製版したので良いものが出来そうである。

★「谷町」同様、著者の顔が出ている句ばかり選りだした。佳句であっても著者の顔が浮んでこないのは無礼にも割愛した。この一冊にこの人のすべてを出したかったからでもある。

王選手800号

★昨年の10月号でアーロンを抜く756号にふれたが今年はもう800号だ。

（不二田一三夫）

カッケ〔脚気〕／肉体疲労時のビタミンB1補給に
アリナミンA
☆筋肉痛・肩こり・腰痛・神経痛の緩和にも
☆アリナミンA25ミリ錠のほかに5ミリ錠
タケダ

ご進物に重宝な
近鉄の商品券
★500円から50,000円まで各種ございます
先様にお望みの品をお選びいただける
手軽で便利なご贈答品です　ご進物には
近鉄の商品券をどうぞ
近鉄百貨店
アベノ店 06-624-1111 ／ 上本町店 06-779-1231 ／ 奈良店 0742-33-1111

▼葉子コーナー

▼齢のせいか私も近頃、陶磁器に惹かれるようになりました。

▼友人に焼きもの凝りがいて、趣味のいい食器類で持成されますと自然に食欲をそそられます。

▼村田珠光、武野紹鷗、千利休によって国焼がつくられてから自由に茶人の目で選び出されるようになったのですが、当時はお邸に窯を持っていて四季折々、好みの焼物を焼いたと云います。

▼私も自分の窯を持ちたいですが、恐らく夢の夢ですね。

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和五十三年九月二十五日印刷
昭和五十三年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻　六一六号

美の殿堂
大和文華館

平城京をめぐる山々を一望の
静かな環境にある大和文華館
は　日本建築の特色に近代美
を生かした美術の殿堂です
収蔵品も日本・中国を中心に
国宝・重要文化財を含む　有
数のコレクションです
観覧時間…10時～17時
▶近鉄奈良線　学園前駅すぐ

近鉄

川柳塔

十月号

グラス六杯
大型1000ml瓶
わずか一七〇円
サントリー
果汁入り
オレンジエード
標準中味価格・瓶保証金30円別
果汁入り飲料はサントリー
Suntory
ade

定価　四百円（送料・二十九円）